

# 愁伯の 壮年単身赴任時代の 東海・富士地区における 訪問記です。

史実への完全一致については不安ですが、  
その土地にある郷土資料を参考にしながら、  
本人の手足と耳目で  
感じたことを綴っています。

中でも、  
今川氏親に関する記述は  
斬新だと勝手に思っています。  
どうする家康では語られなかった  
英雄今川を垣間見ることができます。

骨休めになれば幸甚です。

愁伯の追伸！

鳴海城（現名古屋市緑区鳴海町）と

大高城（同緑区大高町）へは行っておきたかった。

# 足柄峠

足柄山から見た富士山は雄大だろうなって思いつつ、お天気とお休みがマッチせず、悪く早や五ヶ月！・・・といっても、今年はずーっと天候が悪くしかも嫌いな霧が多い。

九月上旬、やっと拝めそうなチャンス到来！

「そうだ、小富士からの眺めも良いらしいから近いしそこに先に行こう！」富士山山開き中の週末、五合目駐車場満杯。Uターンをお願いされ、渋々何も見ずに下山して足柄山へ向かう。しかも霧発生の気配。思いつきを採用したことへの天罰なの？

間に合った！富士山が見える。御殿場町から小山町から視界いっぱいの一面の裾野から富士山の頂まで！初めて見たぞ！よかった！思わず「校長じゃないけど、忘れ物にお目にかかれた！やっぱり絶景かな！」。

ところが一方、富士宮の上空から籠坂峠まで一定の標高である幅の雲がかかっているのに気が付いた。我が近隣の霧の正体を見つけたり。

富士山を見ているところは、秀吉が小田原攻めをした際北条氏直の家臣戸田大膳が守っていた足柄城址で、足柄峠そのものに依って築城してある。

古より、東から西に向かった人・例えば防人の任に付く人、反対に西から東へ向かった人（例えば東夷、蝦夷をの争乱を鎮めるために出陣した人）、そんな人たちの望郷の念が思わず高まる所らしい。少し、神奈川県に入ったところに万葉の道という散策路が設けてある。

すぐ近く金時山へ向う道脇に、新羅三郎義光の山笛の調べという石碑が建っている。後三年の役で兵力不足に苦しむ兄八幡太郎義家を助けるべく、職をなげうって、出羽に向かう途中、源軍が負ければ、笛の奥義継承が途切れることを案じて、後継者豊原晴元（時秋の説もある。）に、亡師豊原時忠から授けられた笛の秘曲を吹いて聞かせ、京に引き返えさせたと伝えられるところだ。毎年恒例で9月の中旬に足柄峠笛まつりが行われ、笛塚供養の和学演奏などが行われて歴史を伝えている。

弟にそこまで思わせる義家とは、頼義とともに前9年の役を闘い、板東の紛争を平定し、そして後3年を鎮圧した清和源氏の綺羅星で、後の戦国大名達が挙ってその武勇を崇めたあの、南無八幡太郎義家である。あの時代の腐敗した摂関政治の中で、貴族達の保身のための権謀術数を忌み嫌いかわしつつ、世の中の平和と安寧をひたすら願って戦い、名誉や恩賞の無沙汰にも耐え、私財を部下に分け与えて公に尽くした武人の神と言われる。

やはり、男は強くなくては生きてはいけない。優しくなくては生きる資格がないということか！

そして、更にずーっと昔、平将門が関所を設けた址がある。ここを境に関西と関東となるという。でも、名古屋の人は「迷惑だぎゃー！」と言うだろうな！尾張と三河が日本の中心と思っているから。自分なりに、関ヶ原の関所以西を関西と言い、足柄及び箱根の関所以東を関東と言い、その中間はその時代時代で海道だとか東海だとか言い方を変えてきたと思っている。

・・・等と思っていると口に出たのは「足柄や一まの金太郎・・・」

# 足柄神社

籠坂峠から小山町～足柄峠～足柄神社と昔の鎌倉街道への道を走ってみた。途中、途中で景色の良い場所を見つけては止まって、秋の景色を楽しみながら。

籠坂峠から小山町まではずーっと緩い下り坂、そして鮎沢川を越えてから足柄峠に続く登り坂になる。

足柄峠までは、振り返ると富士山の美麗がすぐそこにあり、なんだか「頑張りなさいよ！」と優しく背中を押して貰っているような気になる。

峠に着くとやっぱり“ふーっ”と一息。富士山の方をぼんやりと眺めてみると、その先に、ふと、故郷が思い出された。

来た道を振り返り、心の中で富士山に感謝するとともに駿河の国や故郷にお別れを告げたであろう古の人々の気持ちが分かった様な気になる。

峠を降り始めていくと、そこは森の中の山道であり、富士山に背中を押して貰いながら峠に向かった暖かい感じの駿河路とは全く趣を異にする。今日は秋の日射しと紅葉で清々しいが、曇りの日や雨の日は暗く寂しい感じの山道なのだろう。道はかなり急な坂道で足腰には負担がかかるが、その分、山道を降りきるまでかかる時間は短くて済む。降りていく途中に所々視界が開けた所で振り返ると、急峻な足柄の峠へ続く山々の先に金時山の頂上がきつとそびえ、ぎっと睨まれているような感じだ。麓が近くなると山道は終わり、再び視界が開けると今度は、昔はきつと火山だったであろう、富士山を小さくしたような、日本人が思い抱くこれぞ典型的な日本の山と言えるような矢倉岳が、すぐ左手に現れる。これには相模の国に入ろうとする自分を高いところからずーっと監視されているような気にさせられたが、地蔵堂トンネルに着く頃にはそれにも慣れ、トンネルを抜けた所にある橋から見上げる矢倉岳は、すっきりとした面もちに加え、肩まで様々な沢山の紅葉衣装を身につけ、随分と美しい容姿になっていた。

やがて、矢倉沢を過ぎると、道はゆっくりとした傾斜に変わる。

そろそろ、相模の国も近いのだろうと思うところに足柄神社への坂道が左手に現れた。きつと昔からのままだろう、苔むすような石段が少しだけ残っている。両脇をミカン畑で囲まれた急な坂道を上り詰めると、足柄神社がある。登ってきた坂道を振り返ると、右手遠くに矢倉岳から足柄の山々、その中にうっすらと金時山が見える。左手先には、小田原の町並みがそうーっと遠くに見える。

足柄神社は日本武尊を奉ってあるが、本殿のすぐ隣には、荻野に住む57軒の人々がずーっと昔からお守りしてきた本地垂迹説が栄えたころから続く古の石像等が沢山奉ってある。 ありがたい！

きつと、古のこの鎌倉街道を通った人は、この足柄神社で、足柄峠を越えることが出来た御礼を済ませ、これからやっとな百年善政の相模の国に入るのだという気持ちを新たにしたのである。

ところで、南足柄市や足柄上郡・下郡はあるけれど、どうして足柄市は無いのだろうか？ 足柄峠が県境になっているからか？

## 足柄の砦（後北条の守り）

御殿場線沿いに流れる水系は、御殿場市を分水嶺として、西川、深良川、大久保川等を集めて南下し黄瀬川となり駿河湾に注ぐ流れと、鮎沢川、抜川、佐野川、河内川等を集めて酒匂川となり足柄山系を西～北～東と囲むように流れて相模湾に注ぎ込む流れがある。水量は酒匂川水系の方が断然多い。それは、丹沢湖から流れ出す河内川が酒匂川に合流していることが大きな理由だ。まさにその地点、河内川と酒匂川の合流地点の西北側にある城山に、北条家の西第一線新莊城は在った。

不老山山系の南脚にあたるが、北からの峰の繋がりに一旦終止符を打ち、西は急峻な山地に、東と南はそれぞれ河内川と酒匂川に護られ、丹沢湖方向からの道路と山中湖から三国峠を抜けて駿河小山に入り小田原に抜ける経路を完全に制する要点である。ただし、駿河小山から川西そして平山までの間は酒匂川に沿った急峻な斜面にしか道がないため、少々の雨で川を渡れなかったり、道が崩壊して通行できなかったりということが多々あったろう。

やはり、昔は、足柄道を頼りにしていたはずだ。酒匂川を見通した南側は足柄山山系鳥手山に続く峰が見上げるように聳え立っている。北側は丹沢山系に続く道路沿いに視界が開けており、秋の時期は、山々の紅葉と透き通った川の流れがたいへん美しい。

足柄峠から東に向かい下つてくると途中に、関場と言うところがある。此処は、北へ行けば平山から川西～丹沢へ、そのまま東へ行けば小田原という分岐点に当たる。ここを北に行くとやがて内山と言うところがある。西側には矢倉岳からの峰が続いている。この山系のどこかに同じく北条氏の足利正面第2線縦深陣地浜居場城は在ったらしい。

川西から松田に抜ける経路や足柄峠から小田原に抜ける経路に対して十分に睨みを効かすことが出来る良い場所だ。

かつて、伊勢新九郎は、長年をかけて実施していたマンネリ作戦（またもや狼が出たぞ作戦）により、小田原城の兵の気力を萎えさせ、小田原城下発展の原点とも言える大森氏頼が没すと「機は熟した。」と見て、一気に葦山城から小田原城に攻め込み大森藤頼をはじめ一族を追放させたが、その大森氏が、最後の一戦を期したのがこの浜居場城であった。今は、空堀跡が在るくらいで当時の面影を偲ぶものはあまり見つけられない。

大森氏はその後、三浦半島の三浦氏を頼ったが、最後は三浦氏とともに長氏に滅ぼされることとなる。

大森氏頼とは系譜は異なるとも言われるが、「竹之下より起て、小田原の城を取立、近郷を押領」した大森安楽斎は、氏頼の父・頼春（？）（先祖の頼頭？藤頼？頼明？）であり、竹之下今で言うJR足柄駅付近の駿東郡小山町の出身だったらしい。

わが町の歴史上の有名人として扱ってあげればいいのか！

この浜居場城から鎌倉街道を南西に行くと、先述した、足柄城に至る。足柄城は山頂の一の曲輪から小山町方向に流れる尾根沿いに五の曲輪まである連郭式の山城で、しかも天然の強固な地形を利用している。そんなに弱い城とは思えないのだが、後北条の終焉に際し、一矢を報いることなく落ちたのは、山中城の落城があったとは言え、やや不本意な気がしないではない。

# 今川氏親まで

今川氏は清和源氏の末流で足利氏の一族である。

足利氏は八幡太郎義家の三男義国が下野国足利に入り、その次男義康が足利の地を引き継いだことから足利氏が始まる。義康の孫義氏は承久の乱の功により三河国守護となり同国の額田郡、設楽郡、吉良荘、碧海荘の地頭職を得る。この義氏の庶子長男長氏は家督を継がず、吉良荘に居住し吉良氏の祖となる。長氏は吉良氏の家督を長男氏満に譲ると今川の地（現在の愛知県西尾市今川町）に隠居し、この地を二男国氏が継ぎ今川を名乗った。

国氏の跡は、嫡子龍王丸(タツオウマル)後の了俊が言う「無徳の人」基氏が継ぐ。

基氏の跡は、当初長男頼国が継ぐが、中先代の乱（1335）でその頼国をはじめ三男まで討死し、四男は円覚寺や建長寺の住職であったため五男の範国が継ぐ。この範国から花倉に居住するようになり駿河今川が始まる。

範国は、建武政権や後の足利政権から遠江守護を命ぜられ、後は駿河守護を命ぜられた。範国は駿河守護を室町幕府で九州鎮静化に功がある二男の貞世（了俊）に継がせようとしたが、了俊が辞退したため長男の範氏が家督を継いだ。

範氏は、葉梨荘に入り、駿河守護や遠江守護を勤め、その死後家督は長男氏家が継ぐ。この時も範国による了俊相続の動きがあったが了俊に再び固辞されている。

氏家も、駿河守護など勤めた。しかし、一子もなかったため、死に臨んで了俊の子貞臣に家督を譲ろうとしたが、了俊が範氏の二男泰範を建長寺から還俗させて相続させた。

泰範は、駿河・遠江守護を勤めたが、1405年からは斯波氏に遠江守護を獲られた形となった。泰範の後は長男範政が家督を相続し、駿河守護となる。

範政は、府中には入り、鎌倉府の監視役としての勤めを良く果たし、上杉禅秀の乱の平定等に尽力している。しかしながら、家督を末子の千代秋丸に相続させたいと申請したため、長男彦五郎に幕府が、二男弥五郎に管領細川氏が、三男千代秋丸に山名氏が付き、これに国人層の対立が絡んで内訌が続いた。結局は、範政の死去に伴い幕府からの御内書により長男範忠が家督を相続する。

範忠は駿河守護となり、岡部・朝比奈・矢部氏の協力と三河・遠州からの幕府援軍をもって三浦・進藤・狩野・富士・興津氏などの反乱勢力を鎮圧し駿府府中今川館を盤石にし、その後も結城合戦、享徳の乱等に幕府の先兵として活躍している。

範忠の跡を継いだのが、義忠である。応仁の乱で、東側細川勝元に与したため、西側山名宗全に与した遠江守護斯波義兼と対決し遠州で一進一退の攻防を続け、1476年には斯波氏に通じていた横田・勝間田氏を攻め落とすも、その凱旋中塩買坂で不慮の死を遂げ正林寺に眠った。

この不慮の死がまた内訌の原因となり、嫡男僅か六歳の龍王丸後の氏親に対し、範政の孫で千代秋丸（範頼）の子小鹿新五郎範満が家督を狙ってきた。この範満には堀越公方足利正知や扇谷上杉定正、更に上杉政憲や太田道灌が接近したため、幕府は、幕府政所執事伊勢氏一族の伊勢新九郎長氏（義忠の正室（龍王丸の母）である北川殿の兄弟）を派遣して龍王丸が成人するまで子小鹿新五郎範満が家督を代行するという折衷案で解決を図ったが、範満は氏親が成人しても家督を返そうとしないため、長氏と氏親で駿府館に範満を襲撃して討ち取る。

そして氏親は西へ！長氏は東へ！と親今・北時代が始まる。

「今川氏のすべて」（小和田哲夫）（1994新人物往来社）『義元までの今川の流れ』（平野明夫）参照

# 今川氏親（府中へそして駿府から）

「義忠の不慮の死に伴い、嫡子龍王丸（四歳とも六歳とも言われるが）が幼少であることを原因に、家中は龍王丸を擁する一派と、一族で義忠の従兄弟にあたる小鹿範満を推そうとする一派に分かれて内訌が始まった。解決の糸口が見いだせないため、江戸から関東管領上杉家の名将として名高い太田道灌が内紛調停に来るほどであったが、道灌は彼の留守を狙った長尾の謀反により、今川家の内訌が収束しないまま帰還しすることとなり龍王丸は駿府城を逃れ、母の北川殿とともに泉の谷に身を隠した。内乱を収めたのは北川殿の兄、伊勢新九郎長氏（のちの北条早雲）で、龍王丸が成人まで小鹿範満を後見人として政権を担当させるという結論で一応の決着を見た。龍王丸はこれ以後、長氏を師父のように思い、武将たるものの心得を吸収し、聡明に成長していくが、龍王丸が十七歳になっても範満は家督を龍王丸に戻そうとしなかったため範満に今川の家督を譲るつもりなしと見て、長氏は龍王丸一派と駿府館を急襲し、範満を討ち取り、龍王丸を駿府今川館に入城させる。こうして晴れて龍王丸改め今川氏親が正式に駿府守護として立った。」とここまで前記述したとおりだが、これがないと今川の戦国時代は始まらないし語れない。

実に十一年ぶりの駿河守護となり、家督相続を認められた氏親は、早速駿河経営に乗り出す。駿府への西からの入り口宇津ノ谷正面は、譜代朝比奈氏の朝比奈城、同岡部氏の朝日山城、今川一族の葉梨花倉城、丸子城と賤機山城で、もう一つの西からの入り口大崩海岸正面は、伊勢長氏の石脇城、一宮氏の持舟城に加えて、方上城を築城して守備がためを行い、駿府の東には愛宕山城を築城するとともに、旗下である庵原氏の庵原山城、興津氏の横山城、一族の蒲原城と善徳寺城、そしてその東に興国寺城を伊勢新九郎長氏に築城入城させ東への守備がためを行った。更にその東の葛山氏とは友軍関係を構築して、甲斐の武田、関東の管領及び伊豆の堀越公方に対するショックアブソーバーを設定した。興国寺城に入った新九郎長氏は、この葛山氏と協力して伊豆を攻める。その後は東へと。後北条への出発である。

そして、氏親は、守護として、西へと体制確立のための拡張をして行った。

明応三年（1494）秋、氏親は遠江へ侵攻し、七年後の文亀元年（1501）には、信濃守護小笠原氏と遠江守護斯波氏の連合軍を撃破し、信濃・三河の国境まで勢力を拡大、永正元年（1504）には、早雲を助けて関東に出兵する。後、氏親は遠江の完全領国化を成し遂げ遠江守護に任ぜられた。

更には、長篠と宇利峠を抑え、三河進出を図った。

氏親が立派な壮年となり、守護から駿河遠江を支配する戦国大名へ見事に変化した頃、嘗ての長氏叔父早雲も関東の覇者となっていた。その早雲は伊豆半島の三浦氏を滅亡させ、北条家繁栄の基礎を固めた後、永正十六年（1519）に逝くが、早雲から多大なる影響を受けた氏親は政においてもこれを倣い、大永四年（1524）に遠江領内に検地を行い、同六年（1526）、三十二条よりなる分国法「今川仮名目録」を制定するとともに印判状を戦国大名として最初に使用して領内の繁栄、治安に勤めた。これは、後世、全国に普及することになる。

氏親は中風により、同年（1526）に五十六歳で没するが、その後の氏輝、義元の三河・尾張への進出のための基盤は完全に構築していた。

今川氏もこの地方の誇りにすべき綺羅星のごとき英傑なのだ。

# 今川氏真（駿府から北条～徳川へ）

さて、ここまで遠州を訪ねてきたことで一つの疑問が湧いてきた。それは、高天神城の価値である。職場の上司もしばしば言っていることでもあるか、「高天神城を制するものは遠州を制す。」と言われていたものの、それほどのものであったとは思われないということである。確かに、遠州今川氏の居城ではあったが、「勝頼がここに執着する理由として大げさに宣伝しただけのことではないのか？」と思いたくなる。

なぜなら、今川隆盛時代の遠州における今川の配城を見ると、掛川城を中心に南東の4時方向から時計回りの半円状に、持舟城、堤城、高天神城、馬伏塚城、久野城、飯田城、天方城等が、そしてその西方天竜川東岸沿いに、北から二俣城、社山城、匂坂城、見付端城が、整然と配置されていることが分かる。遠州今川氏の中心的な城は了俊が居城した見付端城とその重鎮朝比奈氏が居城した掛川城であり、義忠等が斯波氏との対決の中で優位を占めていくに従い、近隣の豪族を配下に組み替え、このような遠州支配の体制が出来上がったのだ。これらの体制から見ると今川隆盛時代の遠州の中心は掛川城だとする方が適当だと思われる。

この配置は今川氏親の時代には出来上がっていた。これを基盤に内紛を鎮めた後、戦国大名今川義元は甲斐・相模との三国同盟で憂いを無くして、三河へ進出していく。政務の多くも三河で行っていた。

永禄3年（1560）5月15日、義元は桶狭間で豪雨の中で織田信長の軍兵に不意をつかれ、討ち死に、全軍総崩れになった。この時、氏真は22歳。

さて、後を継いだ今川氏真（うじざね）はどのような人生を送ったのだろうか？

年若いためか、力不足からか、長い年月を待たずして、三河、遠江の国人の相次ぐ離反で力を失い、更に東の武田軍、西の徳川勢の侵食を受けることとなる。

永禄11年（1568）12月13日未明、今川氏真は武田信玄の駿府侵攻に伴い、従者2000人余りを引き連れ、駿府の今川館を脱出した。準備時間がなく、多くは女子供、老人といった非戦闘員で、北条氏から嫁にきた氏真夫人も乗り物も得られず素足同然だったということだ。

今川氏真一行は西に向かい、安倍川を渡り古刹建穂寺に立ち寄った後、山道を抜け、12月15日今川家の重鎮朝比奈泰朝の居城掛川城に入った。

この間、今川勢の脱出に伴う武田の焼討により、多くの今川の財宝が灰燼に帰したのをはじめ、浅間神社、臨濟寺など駿府の町も焼失した。

掛川城での仮の住まいも短く、翌1569年には徳川家康の遠江侵攻が始まり、徳川家康軍の包囲に5ヵ月に渡る籠城を続けたものの、遂に和睦し開城した。氏真は婚戚関係にある北条氏康の下に逃げた。この時点で戦国大名今川氏は滅亡する。

北条氏康死後は跡を継いだ氏政の政策により北条家を追い出され、徳川家康を頼り浜松城へ行く。氏真は家康に牧野城（旧諏訪原城）城主として迎えられるが、後に再び流浪する。

その後、氏真は小田原の北条氏、浜松の家康の庇護を受けながら家名再興を図ったが断念し、最後は江戸に下り、徳川家臣の高家として、生涯を終えた。

でも、今川家は江戸末期まで続いたのだ。 やっぱり人間って強い！

# 今川・北条関係

この資料は、仕事場で仙人と呼ばれている人からのリクエストに応えたものだ。仙人曰く「断片的な資料ばかりだと全体が見えない。今川最強三代と北条の関係が一読で分かるような資料はないのか？」う・うーっ！わっ・分かりました！

1461年、今川義忠は8代将軍足利義政から「義」の字を与えられ、家督相続を認められた。義忠の父範忠は、幕府軍の有力な一部として、永享の乱、結城合戦、享徳の乱等関東地方の乱に参加して幕府を助け、義忠自身も享徳の乱に範忠の名代として参加している。これらの功を認められたものだろう。それまでの駿河今川の主は、駿河今川氏の始祖、範国の「範」という字を使っていた。

義忠の時代京都で応仁の乱が起こり、義忠は旗幟を鮮明にするため上洛した。元々駿河・遠江守護だった今川氏の子孫として、この機会に西軍に就いている遠江守護斯波義廉を東軍細川勝元派に属して挟撃し、遠州の奪回を図ったのだ。この上洛時に義忠は、幕府政所執事伊勢氏の新九郎長氏の妹（姉？）北川殿を娶った。この息子が龍王丸、後の氏親である。彼が6歳の時、義忠は、斯波氏に通じた横地氏及び勝間田氏を攻め落としその凱旋帰国中に塩買坂（牧ノ原台地正林寺の近く）で残党に落命させられた。この後の今川家の内訌と伊勢新九郎長氏の奮闘及び北川殿と龍王丸の悲願達成については先に記述したとおり。

龍王丸は1487年家督を相続した後、時期は不明だが氏親と名乗った。新九郎長氏の「氏」を採ったものと思われる。氏親の嫡男にも氏輝と付けた。長氏を何かにつけて見習い、後の早雲の相模平定にも力を貸している。

氏親の正室は公家の名門中御門宣胤の娘「大方殿」で、氏親の死後、氏輝が16歳の当主となるまでの2年間今川領を治め、女戦国大名とも呼ばれた、後の寿桂尼である。氏親との間に嫡男氏輝と五男梅岳承芳を産んだ。氏親の庶子は他に4人。氏輝は父に見習って北条との良好な関係を維持し、早雲の嫡男北条氏綱とともに朝廷への3万疋の献上や、駿河に侵入した武田信虎への共同作戦を行っている。この時の北条の最西線は北から生土城～足柄城～大森城～山中城～戸倉城～韮山城で御厨平地の東側であった。御厨の西は親今川葛山氏の領地である。

氏輝は僅か24歳で嫡子がないまま他界した。ほぼ時を同じくして二男彦五郎も他界した。此处で生じた内訌は先の記述の通り、花倉の乱で善得寺梅岳承芳の勝利に終わる。承芳は、還俗して12代将軍足利義晴の「義」を貰い義元と名乗り、親武田色を強く打ち出した。このため、親北条関係は一旦断絶する。氏輝の死と親武田態勢への変換はあまりにも匂うが事実是不明のままである。

義元は、1536年三条公頼の娘を武田信玄に斡旋し、1537年自らも信玄の姉を娶る。ここで甲駿同盟が成立するが、妻が1550年に早くも他界したため今度は1552年信玄の長男義信に娘を嫁がせ同盟関係を維持した。

一方、これまで、共に協力して武田に対処し、補完し合いながら拡大してきた今川・北条関係を続けて来たつもりの北条氏綱にとって、これは今川との手切れのシグナルでしかなかった。これに怒った氏綱は、1537年遂に暗黙の了解最西線から西進し富士川以東の地域を占領した。河東一乱の始まりである。1545年、今川軍が吉原（富士市）まで侵攻し当時の北条家当主氏康との間で一応の和議三方輪（同氏、上杉憲政、今川義元）が成立するまで続いた。その後、政略的必要性から関係は改善され、1553年に武田信玄の娘と北条氏康嫡男氏政との婚約により甲相同盟が、1554年に北条氏康の娘と今川氏真との婚約により相駿同盟が成立し、結果として三国同盟態勢が確立されたのである。～桶狭間！

# 小田原城

昔、戦国時代、小田原の平野に西国から入るには、小山町から足柄の峠を越えるか、三島から箱根の峠を越えるか、御殿場・裾野から獣道のような長尾峠・湖尻峠を越えるか、あるいは、甲府をから丹沢山系を抜けるかであったろう。丹沢正面への抑えには新荘城が、足柄正面には深沢城と足柄城が、続いて浜居場城・沼田城が、三島正面への抑えには山中城が、御殿場・裾野正面からの抑えは、葛山城や三島正面からの縦深形成の意味を含めて、鷹ノ巣城がある。やっぱり、北条は戦略的な思考ができる武人だ！ 要所にはキチンと布石をしている。これらの城の配置は、北条氏が小田原に入城した後のこと。

今回は、山中城から元箱根そして県道732号線沿いに奥湯本を通過して、小田原に入った。目指すは、生涯で2度目の小田原城。やはり此处も6年前に、北条早雲の足跡を訪ねた所で、伊勢新九郎の名を目にし、興国寺城から葦山城そして小田原城への早雲の生涯を少し垣間見たような気がした事を覚えている。

小田原城は、まさに、足柄山系や箱根山系からの出口を抑える要点にあるが、所謂平城で、外堀や内堀を備えてはいるが、天然の要害を利用したというものではなく、戦闘の利便性よりも政治のシンボルとしての意味合いが強い。

天守から眺めると、南に深く青い相模湾、東に小田原の平野と遠く深緑の大磯丘陵と丹沢山系、北に近く足柄山系、そして西に箱根山系が見上げるように迫っている。東の平野に、領主としての威厳を示したいが、西への備えにも気がかりな様子が窺えるような位置にある。

ただ、富士山が見えないのはなんとも趣がない。

早雲は、葦山の城に入ってから、何度も小田原に攻め込む気配を扇谷管領に見せつつその度に押し戻された。しかし、何年も顔を出しては引っ込める行動を続け、ついには、扇谷管領にこの対応に飽きさせ、やがては、葦山に追ってこずに関東に戻す上杉の隙に乗じて、小田原に攻め込み大森氏を破り、小田原城に入り、引き続き鎌倉公方や三浦氏を追い出し、相模の国を手中にした。戦国時代の到来である。

しかし、戦国時代の先駆者という言い方では、気の毒な気がする。早雲21箇条は、当時の領民に有難く受け入れられ、その後、氏綱～氏康～氏政～氏直の5代100年の比類無き善政の地が続いたことを思えば、悪しき風習の改革者と言えると思う。氏綱に家督を譲った後、早雲は、葦山に戻っている。

やがて、戦国時代もこの北条氏の滅亡によって終焉を迎える。これも、また、奢れるもの久しからずの言いだろうか。その物語は、今は、イマヌキとビヤクシンしか知らない。

因みに見聞館は興味深いよ。

# 小山町（金太郎）

足柄峠で口ずさんだ童謡の生地がこの辺だったと思い資料を探す。

やっぱりあった！金時神社！

金時神社は小山町の町中にある金時屋敷の跡に建てられている。

足柄山の金太郎が生まれた時に産湯として使った「ちろり七滝」は、水量は少ないものの、今でも涼しげに流れを保っている。

金太郎は、源頼光に見出され、主従の関係を結び、頼光四天王の一人として活躍する後の坂田公時である。

中でも、大江山の鬼退治は有名だ。少し前、伊丹で勤務していた頃、お世話になっている仲間と天橋立で有名な京都府宮古にバスツアーしたことがあり、その途中丹波大江山の麓を通り、酒吞童子を坂田公時達が退治したというバスガイドさんのお話があったことを思い出した。当時は、「血を飲む赤鬼は、ワインを飲む白人系の遭難者だったろう。」と割と冷静な見方をしていたが、金時神社では、坂田公時が退治したのはやはり大江山の鬼なのだと納得してしまう。

「足利の人は強靱な感じが似合う。」ということだ。

この金時神社は、小山町中島という地域の、昔、坂田屋敷があった跡地に建立されている。

金太郎の母は、中島の彫物師十兵衛の娘で、八重桐という人だった。八重桐は、京都に上った折りに、大宮人坂田蔵人と結ばれ懐妊したとのことであるが、夢の中で赤龍と結ばれたという伝説もある。

懐妊後、この足利の里（小山町湯舟地区）、中島の実家に戻った八重桐は、産月が近づくと湯舟町の出湯に毎日通った。夕刻に宿に到着し出湯を使い、翌朝実家に戻ったということだ。いつものように湯治から帰るある朝、にわか産気づき、実家に戻る途中で金太郎を出産した。この地は、「子産田」の地と呼ばれており、今の湯舟・柳島地区への南からの入り口付近に当たる。碑が設けてある。

先の温泉は、八重桐が朝帰る湯ということから「あさかえ湯」と呼ばれ、近年まで湯治客でにぎわったらしい（古い地図には確かに温泉マークがあった。）が、今は営業していない。東名高速道と国道246号線がこの湯舟地区をバイパスしたため、人足が遠のいたためではないかと浅慮する。ちょっと残念だが。

小山町の住人としては、金太郎ゆかりの地のはもちろん、湯舟八幡神社の樹齢250年以上の小山町指定天然祈念植物「夫婦杉」や飯盛山「本蓮寺」、そして清流野沢川の支流等は是非訪れていただきたい場所であろう。

この中島・柳島・湯舟地区は、葛山地区と同じように35年前にタイムスリップしたような古き良き時代の、懐かしい、微笑ましい、大好きな雰囲気がある。

日本人は、否、私は、定見が無いからか、土地を好きになるのが早いらしい。さもないと、土地の人から村八分にされるかもしれないと言う不安も手伝っているのだろう。日本人のDNAに組み込まれた性質なのだろうか。

# 小山町（竹之下）（その1）

金太郎や足柄峠に続いて、今回は竹之下について紹介する。竹之下と言え、室町時代、上杉禅定の乱で活躍し、1417年その功で相模を与えられ小田原城を構築した大森頼頭を輩出した地として歴史に出てくるが、その少し前、足利尊氏が室町幕府を開幕する過程で新田義貞兄弟が率いる後醍醐天皇側官軍と闘った竹之下合戦の地であるといった方が有名である。

ところで、北条執権政権が崩壊し、朝廷が南北に分かれ、室町幕府が落ち着くまでの時代に対する評価は実に様々である。確証的な歴史資料が無いからだろうか？

治世力が乏しくなった北条家を葬り天皇の世を再現しようとして艱難辛苦に耐えた後醍醐天皇や北畠一族を正当化するもの、知恵と力を持ち合わせながらも阿野廉子の誹謗により失脚させられた護良親王を美化するもの、優柔不断だが政治力に富み憎みきれない足利尊氏を讃えるもの、ナンバー2としてひたすら滅私奉公して治世に心血を注いだ直義を哀れみ賞賛するもの、悪役を引き受け知力、胆力、暴力の限りを尽くして尊氏を支えた高兄弟を評価するもの、貴族政治に携わる者を不遜不貞と知りつつも最期まで死力を尽くして支えようとした楠木一族や新田義貞を哀れむもの、急激な時代変化の中で領地領民の安泰を維持し続けようと毀誉褒貶を勞しつつも東奔西走した赤松一族や佐々木道誉を現実主義的国主として評価するもの等。そして焦点を当てた主人公の反対側に位置するものは、楠木一族を除き、当然ながら、主人公を際立たせるため、概ね批判嘲笑の材料の持ち主とされる等等。

まさに、諸子百家、言った者・書いた者勝ちの感有りだが、ここで室町幕府成立前後の出来事を簡単に紹介する。まず、竹之下合戦まで！

元寇への対応から清貧政治を更に逼迫させた北条政権は、後醍醐天皇に正中の変や元弘の乱を起こさせる隙を与えるほど弱ってしまい、1332年、後醍醐天皇を隠岐島へ配流したものの最期の執権北条高時は地方豪族や悪党の台頭を押さえることが出来ず、ついには後醍醐天皇の隠岐島脱出を許してしまい、反対に後醍醐天皇から北条氏討伐の綸旨を出され、1333年、これに呼応した足利尊氏と新田義貞に京都六波羅及び鎌倉をそれぞれ落とされてしまう。朝廷政治の復活を狙う後醍醐天皇は武家の力の結束を憂慮し新田義貞を京都に呼び、足利氏と新田氏の相互牽制を画策する。1335年北条高時の舎弟時興の次男時行が起こした中先代の乱により、護良親王は幽閉先の鎌倉で自害し、尊氏の舎弟直義までが千寿王とともに鎌倉から墮ちたためこれを助けに尊氏は京都を立つ。ところが、中先代の乱は、尊氏が鎌倉へ入る前に消滅したため、尊氏は難なく入城し、京都に戻る気配を見せない。これを機と見た後醍醐天皇は尊氏討伐の綸旨を発して、尊良親王、二条為冬、新田義貞をはじめとする官軍を鎌倉へ向かわせた。これには大友左近将監、塩谷判官高貞と途中から佐々木道誉が傘下に入る。一方の、尊氏は箱根の要害を決戦場とし、尊氏は足柄峠正面を、直義は箱根峠正面を担当する。これに対し新田義貞は箱根峠正面から、舎弟脇屋義助等が足柄峠正面から攻撃する。義貞はもう少しで直義を捕捉する所まで進出するも足柄峠正面では二条為冬旗下の北面の武士集団が功を焦り先駆けするとともに先述の大友、塩谷、佐々木の返忠により態勢が一举に瓦解され敗走させられたため、義貞も兵を引かねばなくなる。この脇屋義助が奮戦した場所が小山町の竹之下古戦場であり、そこを流れる鮎沢川に架かる千束橋の名は、官軍に落とされた橋を尊氏側が千の薪束を落とし応急橋としたことに由来する。

## 小山町（竹之下）（その2）

竹之下古戦場跡の石碑と千束橋は現在のJR足柄駅付近にある。そこから西へ富士山方向へ上がると足柄ポケットパークという小さな見晴らしポイントがある。ここからは正面の足柄峠と金時山そして竹之下から足柄の里までが見渡せる。絶対に脇屋義助もここで戦況を見渡したはずだ。すぐ南東に位置する臨濟宗の興雲寺の境内に「脇屋義助の軍が屯しており矢台からの火矢で寺が焼失した。」とあるから、間違いない。そして鮎沢川および黄瀬川沿いに退いたのであろう。二条為冬等の功焦りと真っ先後退だが、昔からというか今も変わらないというか、中央役人の奢り、肩書きへの高慢さ、責任感の薄さ、使命観の欠如といったらまさに“お役所仕事”で、ほんとうにやるせない気分になる。

話を戻して、室町幕府の安定までを簡単に紹介する。

官軍を敗走させた尊氏は山崎正面から義助を打ち破って京都に侵入する。後醍醐天皇と義貞は一旦比叡山に退き、尊氏と小競り合いを続けるが、東北から駆けつけた北畠親子及び中山道から戻った桐院実世が京に入るや尊氏は堪えきれず西へ落ちていくこととなった。

九州へ渡った尊氏は、九州の勇菊池氏と筑前で闘いこれを退けたことにより逐次旗下に参じる兵を集めて、陸と海の両方から瀬戸内道を東上する。この間、赤松円心一族が懸命に脇屋義助達を白旗城等で防ぎ、更に、光厳上皇より義貞討伐の綸旨を受けた尊氏は、錦の御旗を掲げて勢いづき、湊川で尊王の志士楠木正成を破り入洛し1336年遂に室町幕府を開いた。

後醍醐天皇は、尊氏の手落ち比叡山を下り京都花山院邸に幽閉され、後醍醐天皇に見捨てられた形となった新田義貞は恒良親王を携えて敦賀へ落ちてゆく。ここで室町幕府は盤石になると思えたのも束の間、後醍醐天皇は花山院邸から逃れて吉野に入り南朝を主張する。

しかし、北畠一族や桐院等に呼びかけ再興を図ろうとするも、義貞は燈明寺縄手で没し、北畠は奮わず、光明天皇より尊氏が征夷大將軍に任じられた1339年、後醍醐天皇は失意の内に逝去する。これを契機に室町幕府は、態勢を充実させる一方、夢窓疎石に命じて後醍醐天皇を祀る天竜寺を建立する等民心の安定にも努める。

ところが、南朝方に組みする楠木帯刀正行が旗揚げし、1348年四条畷で没するまで怨嗟の火種は燻り続け、やがて同族や肉親の骨肉争う対立へと飛び火する。1349年尊氏舎弟直義が上杉重能及び亀山直宗と凶り高師直の暗殺を企てるが露見し、反対に両名は忠罰され、直義は入道させられる。この間、尊氏の一子と言われる直義の養子直冬が九州で台頭してくる。尊氏はこれを討伐に向かうが、南朝方に、京を攻められ三種の神器を奪われた尊氏嫡男義詮は京を追われたため、南朝方を帰順させるようと尽力する直義が再び立ち上がり、細川、山名及び桃井一族とともに京を回復する。直義に追い出された形になった尊氏は、義直に和睦を請い、高師直兄弟を剃髪させ、1351年、京へ帰洛途中の忠罰を黙認する。

この後、直義は、京に再入洛した尊氏及び義詮に政権を速やかに返上し鎌倉へ蟄居するが、この機を伺っていた北畠派の密偵が運んだ毒を尊氏の指令と思いこみこれを服して逝去する。その後、三種の神器が南朝方の後亀山天皇から北朝方の後小松天皇に帰り一朝廷に戻ったのは、1392年義満の時代である。

時代はいつも、変革期に必要な人を舞台に引き出し、役が終わったら簡単に引き下ろす。惨いようではあるが、それを出来る人が神に選ばれているのも事実だ。

## 小山町（須走）

小山町と言えば、やっぱり「♪頭を雲の上に出し♪」の富士山が有名。富士山は、霊峰富士、富岳、芙蓉、不二山などと沢山の呼ばれ方をする。古来から、その美しさ雄大さに心惹かれ、その一方、噴火の凄まじさに畏怖してきた人々の自然の発想からであろう。富士講という信仰まで生んでいる。

この富士山を崇め、その鎮静を願い、入山にあったっての許しを請う富士浅間神社（5大神社）のうちの一つ、東口本宮富士浅間神社が須走にある。

この神社は、西暦802年の富士山東脚噴火が長期化したため、当時の国司郡司がその鎮静化を願い、斎場を設けて祈祷し翌年4月に富士山を鎮静化させたといわれる跡地に807年建立された。御神体は、富士山の神様とも言われる木之花咲耶毘売姫。日本書紀では山幸彦、海幸彦の母である。また、本殿の後ろには事代主神が奉ってあり、大変珍しい造りとなっている。天照系統の神と須佐王系の神を祭っているからだろうか。

籠坂峠からの国道138線や須走口登山道県道150号線はこの須走で一旦一つになって南に下っている。現在の国道138号線と県道150線は、富士山から麓に向かって走っている溪谷や地隙を横断しているが、これは御殿場へのアクセスを重視したもので比較的時代が新しいのではないかと思う。それに比べ、県道151号線は浅間神社から小山町まで富士山南側の最東側の溪谷の更に東側に沿って走っており、昔からの知恵で使われてきた道路と思われる。

この辺の集落は、須走から下原にかけてこの道路に沿って、発達しており、何のために奉ってあるのか理解していないが、富士白瀧観世音（昔は馬頭観音だったらしい。）やお稲荷様も県道151号線沿いに存在することから、昔の人はこの溪谷の西側には住まないようにしていたのではないかと思われる。

溪谷の西側に住む方々は、噴火の際は、まず県道151号線へ。

宝永4年西暦1704年の富士山の大噴火では、この須走地区も、否、御厨地方一帯が富士山の火山灰で3～5m程、埋め尽くされたらしい。しかしそれでも、人々は生きており、復興に努めた。

須走郵便局の裏手にある伊奈神社は、その当時、復旧の命を受けて奔走した伊奈半左衛門忠順を御厨の父と崇め、奉っている。

復興の労苦に加え飢餓に苦しむ人々を何とか救おうと幕府に嘆願するも甲斐なく、遂に現場指揮官として、御米蔵を開いて、人々に分け与え、その罪を問われて責任を取り、割腹した。

中央と現場の関係は何時の時代も変わらないらしい。現場の実状を勝手に憶測し自分に都合の良い決定を押し付ける。そんな不名誉な立場には居たくない。かといって、須走殿のように籠坂峠や富士山上り口への通行料を盗ることを生業にし（弱気を挫き）、やがては今川系葛山氏の手先となり（強者に諂う）武田氏と戦い、手先として一生を終えることになった主体性なき生き方も御免だけれども！

## 小山町（桜・春）

久しぶりに、海へと下った。

今年の冬は雪が多くて、そして鼻の手術をしたこともあって大好きな古き良き歴史を尋ねての小旅行を控えていたため、随分と時間が経過したような気がする。

今日の当初の目的地は千本松公園だ。若緑の御厨隘路R 2 4 6号を南下し、所々桜に微笑みかけながら更に4 1 4号を南下して、桜花爛漫の沼津漁港の近くにある無料駐車場に到着。そこから、千本松公園に沿って田子の浦へ延びる護岸堤防を散歩する。

青く深い駿河湾、南東の深緑色の伊豆や西南遠く霞む由比の山々、新緑の千本松原、そして若緑と紺碧の背景の中で映える白冠の富士山。「あー、やっぱり来て良かった！」家族への土産デジカメ写真もカシッ！

暖かな気候に確実に向かっていることを示すように、渡り鳥のグループが次々と北へ向かっている。「春霞、1列V列、雁編隊」

2時間ほどの散歩の後に、沼津港前の美味しい豚骨醤油ラーメンを頂いて、毎週恒例の小山町図書館へ向かった。勿論本の返納と借用のためだが、私の好きな平安時代末期から戦国時代、そして幕末・明治維新に活躍した人物に纏わる歴史小説を探すのに最近では時間がかかる。自分の好きな作家の蔵書を粗方読み終えたためなので、更に対象時代を縄文・弥生まで広げて、新しい興味を見つけようとしている。

小山町の春はもう少し遅れる。4月からが本番だ。今は、3月中旬、早春、菜の花の気節。

その2週間後の小山町阿多野、待ち遠しかった春が漸く到来した。桜だ、菜の花だ、白富士だ、雪解け水だ！ビューティフル！「阿多の春、桜、菜の花、富士冠雪」、こんな景色を与えてくださる神々へ本当に感謝感謝！

更にそれから1週間をかけて、県道151号線沿いの桜の開花が北上し、箆坂峠にもやっと桜の気節が到来する。そして、ゴールデンウィーク直前まで続く。

この沿線で最も桜が美しい所は富士霊園で、満開の頃は神奈川・東京からの観光客で賑わう。

一ヶ月に渡って近くで桜を見ることが出来るのは、あまり他には例がないだろう。しかも、晴れ渡った青い空と白い富士山を併せて背景に加えることが出来れば、もうワンダフル！本当によい土地である。

4月下旬、桜が散るが、その頃から、周囲の山々が冬の我慢から解放され、心強い新緑の息吹を吹き出す。「地球も植物もみんな生きているのだな。すべての生き物に支えられて私たちは生きているのだな。」と毎年、つくづく感じさせられる。自然に感謝の気持ちがこみ上げる。

ふと、「日本人の神々はこんなところに昔から在られる。」のだろうと思ってしまう。明確な四季を持つ日本人独特の、自然発生的な、昔からの感慨であり、宗教観なのであろう。

ゴールデンウィークが終わるとツツジの気節だ。

# 勝間田城

大井川の南、榛原町に小さな港、榛原港がある。そこに、牧ノ原台地の北の一角から流れ出している勝間田川が注ぎ込んでいる。この勝間田川沿いに、榛原町から金谷方向に走っていくと勝田、勝間を過ぎた左手に勝間田城はある。県道からは、城址の手前にある茶畑等の小山に視角を遮られ、直接見上げることは出来ない。城址に続く坂道の麓の駐車場に車を止めて徒歩で上る。

勝間田城は、この地方の豪族勝間田定長が築城したもので、鎌倉時代は御家人として鎌倉幕府に仕えていた。元弘の乱では、一族が敵味方に別れて戦うなど、生き残りに懸命であったが、応仁の乱当時の勝間田修理亮が横地氏とともに斯波氏に与したため、今川義忠に滅ぼされることとなった。

お茶畑とミカン畑の小山を上り詰めると、その次の尾根から勝間田城の三の曲輪、二の曲輪、本曲輪、南曲輪と続き、その後ろは一騎駆けの尾根が牧ノ原台地の尾根に続いている。この山城も自然の急峻な地形を活用し、それに人口の崖、土塁、空堀等で補強してある。ここも、綺麗に整備してあり、つくづく、静岡県は立派だと思ふ。それに、この一帯は、地元の土地所有者が寄贈した土地であるとのこと。

住む人が立派だから行政も立派なのかな？

本曲輪から周囲を見渡すと、右手遠くに榛原の町と駿河湾が、正面には勝間、勝田から切山に続く平野と吉田町に延びる牧ノ原台地の尾根が、左手から後方には牧ノ原台地の尾根が見える。そんなに広い視界ではないのが少々残念。

横地城址と同じで、この平地部に対する観測点ではあるが緊要地形と言う程ではない。この地域のシンボルである館を守ることをだけ考えた作りで、交通の要点を抑えようとするものではない。むしろ、そこを避けた様子だ。戦国時代以前の守護大名や豪族は、その自分の土地と血を守ることに、正しく、“一所懸命”だったのだろう。そして、戦国大名が登場し、その領地が増大するにつれ、全体としてその増大した領地を守る必要が生じ、各城の役割を全体のうちの一つの機能として考えるようになり、交通の要点に築城するようになったのだろうと思ふ。

勝間田城の構成に戻るが、三の丸の北、即ち先に述べた城址手前の茶畑等が城を弱くしている。業界用語で言う戦闘陣地を秘匿した点は効果があると言えなくはないが、この前哨陣地は地形的に弱く、一旦奪われた場合は、弓も容易に届く程の足がかりの場を与えてしまうことになる。恐らく、城が落ちるのにはそれほど長くかからなかったのだろうと、悲しいが、思ふ。

勝間田川の流れは、なんとなく弱々しい。・・・が、人間は強いのだ。

今川義忠に落城させられ、城を追われた人は御殿場周辺に移り住んだと言う説がある。小山町の乗光寺や葛山の仙年寺には勝又名の墓碑が多いのもその証左だろう。勝間田城落城で駿府以西一帯の地はいまや今川の地となったため、そこから何とか抜け出さねばならない。ところが、斯波氏には顔向けが出来ず、東を目指したいが、朝霧高原や籠坂峠の北は武田が、伊豆には堀越公方が、箱根の東には扇谷関東管領が、そして足柄の関には足柄一族が居たため、抜けきることが出来ず、同じ藤原氏の流れをくむ大森氏や葛山氏を頼みにするしかなく、火山灰で土地もやせているとは言え御厨の一帯に安住の地を求めるしかなかったのだと思ふ。その後、1707年の富士山の大噴火をも耐えて現在に勝間田一族は続いている。

勝間田城とともに落城した横地城の一族についても付言すれば、彼らは武田氏を頼り、やがては徳川の御家人となり明治まで続いた。

# 興国寺城

かつて、御殿場地区で勤務することが決まった私は、早く3惚れできるために土地や人となりを知ろうとして本を探してみたもののなかなか御殿場そのものを歴史的に取り上げている著書に遭遇できず、結局その周辺だと言うことで、以前から読みたかった司馬遼太郎の「箱根の坂」を読んだ。

確か、はじめの山場は、伊勢新九郎長氏（宗瑞）（後の北条早雲）が今川義忠の不慮の死に伴い、その室である姉の北川殿とその嫡男氏親を助けるため京から駆けつけ、今川家の内紛を落着かせた功により、初代興国寺城主として入城するまでだったと思う。

その後、着任して興国寺城の史跡についていろいろな人に訪ねたところ、通信関係の仕事をしている生真面目な方から「探してみましょ。」と言う暖かい返事があり、後日、愛鷹山の麓で根古屋の付近にそれらしい史跡があることを教えていただいた。そう言えば、その人とは加藤諦三さんの本のことで随分話があったこととを覚えている。早速、休みに出かけたところ、教えていただいたとおりの根古屋という町の県道22号線のすぐ北側に見つけることができた。

貴重な史跡といった風情ではなく、字があせた説明板と史跡表示杭があっただけで、人は殆ど訪ねていないらしく、随分荒れて寂れた印象を受けた。ただ、天守台からは、南に対しての広い視界が開けていたのを覚えている。

今年再びこの地区で勤務することとなり、小山町図書館でふと目にした南原幹雄の「謀将北条早雲」を読んだこととも有り、もう一度訪ねることにした。

再度の訪問で、まず驚いたことは、すっかり草刈りがしてあり、階段やロープも設置され、随分と散策しやすくなったことだ。

そして、城跡が南に向かって凹の形を成していたことが明瞭に解った。城趾は、愛鷹山南山麓に位置して、城下を南に真っ直ぐ駿河湾に続く道（今は興国寺城通りと呼ばれている。）の西側は浮島沼が人の行き来を阻み、東西南方に広がる長い視界は隠れた行動を監視することが出来る。

業界用語で言う、まさしく緊要地形だ。しかも、愛鷹山山麓に繋がる北側は深い大空堀が掘られており、東西の土塁も周囲の平地と5m以上の比高差があり、やはり戦闘を念頭に置いた城塞であったことが窺える。

しかしながら、平城とは違って、居住するには狭いし、戦術上重要な地形に在ることから、安住の地には向いてなかったのだろうと容易に想像ができる。

伊勢新九郎が、韮山へ触手を伸ばしたのも、案外そんな気持ちからだったのかもしれない。江戸時代には、廃城となっている。

だから、興国寺城は根古屋式なのだろうが、その意味は後日知ることとなった

# 清水次郎長

五月の連休が終わって5月15日、梅雨が始まる前に、静岡県を去る前に、かの有名人清水次郎長を訪ねなければ心残りである。曇り空に小雨が混じってはいたが、清水町に車を走らせた。決心が遅かったので、いつもの御厨隘路ではなく、清水町ICまで東名高速を使う。そこから港西側の道路を使って、エスパルス通りを抜けて、まず、梅蔭寺に向かった。



梅蔭寺は次郎長通りの一つ西の通りにあり、次郎長一家の有名な面々が供養されている。また、次郎長の記念館もあり、次郎長の像や遺品を見ることができる。

次郎長は清水の大親分として有名で、若い頃、残り3年の命と告げられたのを契機に侠客として名を上げて行き無理を重ねる。荒神山の決闘等は周知の人も多かろう。だが、寿命が尽きることなく壮年に達すると今度は名士として、新しい時代に相応しい町作りに活躍する。今でいうところの組織的ボランティア協力である。これが、静岡県民が次郎長を尊敬する所以である。城無血開城に奔走する山岡鉄舟への協力、移住者の救済、清水港の近代化協力、富士裾野荒野の開拓、東海鉄道の敷設協力、英語塾の開設等いろいろな偉業があるが、私が最も感銘を受けるのは、新政府軍の攻撃を受けて放置された開臨丸乗組員（旧幕府側）の遺体を集め鄭重に自分の敷地内に葬ったことである。その壮士の墓は次郎長生家の東側に入り江を挟んで今も静かに祀られている。



若い頃、理由はどうであれ、かなりの殺生と放蕩を行った者として、人としての人生の意味に気づいたのであれば、町や人のためだけではなく、きっと自分の罪滅ぼしも含め壮年期の偉業は当然必要だったであろう。自分がもしそうであったらそうしたであろうから容易に想像がつく。しかし、結果を残せたことはやはりすばらしい。そこを出来るか出来ないかが人の価値を変える。

凡人の自分もそうありたいものだけど。



次郎長生家は次郎長通りに今も当時の様子を残すように手入れをされて残っている。お孫さんにあたるご婦人が、興味をもっている人には丁寧に説明をしてくれる。手入れのための費用はかかるはずなのに入場料は無料。梅蔭寺とは違う。感謝の気持ちで次郎長一代記と手ぬぐいを買ってお礼を言って退出した。

やはり、駿府の人々はあったかい。

# 駿府の都一賤機山城

駿遠守護今川一族の、そして北川殿と氏親の悲願である駿府、その象徴、賤機山を訪れた。賤機山は、西側に流れる安部川に沿って駿河平地に流れ込んだ身延山地文殊岳の山脚で、甲州から身延山地内を駿河に抜ける経路及び三河や遠州から現国道362号沿いに駿河に抜ける経路を直接制する要点、所謂緊要地形であり、山上には今川氏の居館（現在の駿府城址）の詰城賤機山城があった。

静岡市内はいつも車が混んでいるので、仮住いを早く出て9時過ぎには麓の浅間神社に到着した。ここには3つの神社が同じ敷地内に建てられている。魔利支天を祭る東照公縁の八千戈神社は日光・久能山東照宮に似て色使いがややきつい。富士山を鎮める浅間神社はお馴染みのお通り。神部神社は駿河国府に置かれた最古の総社で右近の桜に左近の橘を配置してあり太宰府天満宮に作りが似ている。

八千戈神社の左手にある急な階段を登って賤機山古墳の横に出て右折、周囲を眺めながら北に向かって歩く。公園になっているためか結構な人通りである。挨拶を交わしながらハイキングである。急な登りもあるが、山道として整備してあるので登りやすい。大きな桜の木の連なりと電柱があるところを見れば春は市民の花見の場所ってことだろう。市民の憩いの場所ってとこかな？

登ってゆくにつれ比高差と急涯に驚きながら、視界が開ける途中途中で遠くの景色に目を遣る。うーん！絶景！来て良かった。地面を見入ると狭いところでは5m位の幅しかない尾根沿いに歩いていることに気が付いた。しかも思いようによっては空堀や土塁の跡とも思われるような地形も見られる。すでに連郭式山城の出曲輪の一角に来ているような気になる。

神社から約30分ほどで公園の頂上に到着。救世観音が建立されており、静岡の戦禍犠牲者とB29墜落犠牲者の御霊を祭ってある。とういうことは、途中3ヶ所ほどに見つけたペトンの台座跡のようなものは戦時中の高射機関砲の台座に間違い在るまい。やはり昔の人も賢かったのだ。私も、静岡のため此処に置いたはずだ。

公園頂上から見渡すと、北東遠くに冠雪富士山頂、東に瀬名の山脚と沓谷の緑、その真中遠くに東の守りの要、さった峠、東南東に久能山、南東から南に静岡市街と駿河湾、南西から西は、西の守りの要、用宗・満観峰から宇津ノ谷の峠、北は安倍川と遠く連なる身延山を一望できる。駿府入を果たした今川範政や再入を果たした氏親や伊勢新九郎が眺めた景色は、積年の夢の達成そのものであり、いかにも感慨深げであったことだろう。「夢現 海山里の 駿府かな」「富士むこう 氏親殿に 馳走せむ 取り戻さなむ 駿河遠州」という気概だったであろう。

しかし、義元はそんな感慨とは違ったものだったはずだ。西への拡大という野望であったに違いない。氏親の代には、宇津の谷の西は一族の花倉城、朝比奈城や朝日山城で、西南は石脇城や用宗城で固め、すでに遠州の井伊氏や浜名氏を追いやっている。また東のさった峠の以東には庵原城、横山城、蒲原城、善徳寺城を配下に入れ、更にその東には意を通じた葛山一族を味方にした。

義元は更にさった陣屋や三国同盟で東方を万全にし、西には徳之一色城、花沢城や小山城を築城して西への守りを万全にした。父氏親はすでに西遠州を手中に収め、三河への進出の足がかりを築いてくれている。こんな時、賤機山城に登った義元は、「すでに駿河は安定、東の備えは万全、西への準備は完成、これよりは一意三河そして尾張への拡大在るのみ！」と含み笑いをしていたはずだ。

いよいよ、義元が歴史の舞台へ登場する。

# 駿府の都—愛宕山城

先週、仕事仲間の要請に応じて後輩の模擬試験に付き合ったのに加え、今週土曜日は歴代の高級幹部の来校行事に全般ブリーフィング準備と各部等研修のエスコートとして参加したため、今度の日曜日は結構疲れが出るだろうと予想していた。

案の定、土曜日は、夜分早くから意識を失い、いつの間にか寝入っていたが、深夜2時に目が覚めて、その後寝つくことができず、深夜映画を見ていたら、ふと、夜明けの由比ヶ浜から日の出を見ようという気になり、ついでに愛宕山城も見たくなり、まだ暗い4時15分に仮住いを出発することとなった。

途中でお茶とブラックガムを買って御殿場から高速に乗った。沼津ICを過ぎる頃には、明るくなって来た。辺りの木々は、大好きな爽やかな新緑で輝いている。はやく仮住まい周辺もそうなってほしいものだが、一方やっと満開を迎えた桜も長く咲き続けてほしいもので、由比のパーキングで一旦休止して満開桜と御来光を拝もうとしたものの、生憎の濃い朝靄で能わず。でも、またいつか機会があるだろうと気を取り直して駿府愛宕山を目指した。

清水ICで国道1号線に入り西進し、鳥坂ICで県道67号線に入り更に西進する。沓谷3丁目の信号を左折南下して路上に静かに駐車させて頂く。日曜日の朝5時40分、付近の人が活動を開始している様子はないのでちょっと甘えた感じだが直ぐに帰ってきて立ち去ることを心の中で約束して愛宕神社への階段へ向かった。階段は竹林の中を登っている。竹の子のシーズンだとは思が見あたらない。

全体的に大して急ではないが、愛宕神社がある愛宕山城址への階段はかなり急峻であり、曲輪址と思われる平地の周囲は急涯が構築されている。

元々、この山は律令政治時代、山岳信仰の神体山として信仰と修行の場であった。今川氏親は、丸子から駿府へ入ると賤機山の強化に加えてここ愛宕山に府内の東域を制す愛宕山城を構築して府内の地盤を盤石にし、直ちに東に西に東駿と遠州に覇を拡張していった。家康は駿府の鬼門厄除けとしてこの地に愛宕神社を祀った。

昨年冬に賤機山に登ってその価値に感激したことを思い出した。地形的な強度は賤機山ほどではないが、駿府平地の西の要点賤機山に対抗する東の要点愛宕山である。北には静岡の市街と身延山の南山脚を見渡し、東には駿河湾と興津とさったの峠を見通し、東南遠くには日本平を、西南には宇津ノ谷と日本坂を見通し、そこに至る間は静岡市街地と駿河湾を見渡し、西には静岡の中心部を見下ろし、賤機山を見上げる。賤機山と愛宕山の二つを制するものが駿府の親方様であったろうことが容易に理解できる。

本丸があった頂上付近は200～300坪くらいの平地になっていて愛宕神社があるが、お社がない。心許ない人の不審火にあって消失したらしい。同じ人として恥ずかしく悔しい気持ちにさせられる。いつもの通り「すべての神様が人間の生存を引き続きお許し下さいますように」とお願いするしかない。

本丸から一段下がったところが三の丸の跡地で1000坪ほどはあるだろうか広い平地部で今は公園になっている。周囲の東西南北で色々な眺めを楽しむことができる。ご機嫌である。きっと、賤機山と同じで、市民の散策及び憩いの地となっているのであろう。昼頃に来れば、きっとたくさんの散策や参拝の方が来られるのだろうと思いながら下山する。御礼に、下山途中、少しだけ落ち葉を掃いておいた。

まだ、朝の7時前だが、御年輩の方と挨拶を交わした。下山して静かに車を始動させ、「ごめんなさい。」と呟きながら庵原城址に向かった。

# 駿府の庵－丸子城（その1）

“丸子城”そこは“泉の谷”、“古き！良き！今川の里”である。

国道1号線を静岡方向から安倍川を渡るとすぐに現在の丸子町があり、更に浜松方向に向かって行くと宇津ノ谷峠に差し掛かる麓に、昔、丸子の宿があった。

今は、駿府匠宿なる民芸体験館がある。その匠宿の先に、丸子城址に通じる小径がある。入るとすぐ急な坂道となる。木のすべり止めを造ってあるが、所々往時の土石階段の面影が残っている。視界が開けるところで振り返ると泉ノ谷一帯を見渡せる。意外と狭い平地だと思う。北川殿と幼少の今川氏親が家督相続の争いが表面化することを避けて、駿府の小鹿氏から隠れるようにして住んだ所だから狭くて人目を避けた造りになるのも仕方がないのだろうとここでは簡単に納得した。更に、坂道を登り続けると曲輪跡に着いた。11月の下旬だというのに汗ばんだ。

曲輪から、山城全体や周辺を見渡すと、いつも・どこでも「すごいなー、すばらしいなー、昔の武将はやはり偉いなー！」と思わせられるが、この丸子城は、これまで静岡で見てきた城址の中で『最高のすばらしさ！』である。

なぜか？ それは、自然の地形と人工の技術を合体させた築城技術、住民のシンボルとしての価値、緊要地形としての価値そして保存状態のすべてが素晴らしいからである。

南北朝の時代から、今川氏の家臣斉藤加賀守の居城であったが、義忠の急死後は一時期、先にも述べたように、伊勢新九郎が小鹿氏を誅殺してくれるまでの間、氏親が母親の北川殿とともに駿府に戻ることを待ち続けた仮住だった。

この丸子城址は、ダイラボウから南に延びる稜線の南端に位置し、宇津ノ谷から駿府に続く街道から泉の谷への侵入を防ぐ要害を形成している。当時から三角山と呼ばれていたほどの急峻な山のその頂上一帯に人工の崖、堀、土塁等で強化された曲輪群がある。泉の谷から上ってくるとまず、東曲輪、腰曲輪そして本丸となっている。各曲輪は、相互に連携を確保でき、分断される心配はない。また、曲輪攻撃時に足がかりとされるような地形も周りには無い。また、今は植林で視界はないが、右手は宇津の谷峠から左手は駿府まで広い視界を有し背後の北側はダイラボウに続く深い山々を見渡せるだろう。そして、三角山の頂上にある館は、泉の谷に住む人のお館様が居ます所であり、街道に行く人に畏敬の念を抱かせるほど街道を見下ろしている。この街道を軍勢が通過しようとするれば、必ずこの城を獲るか味方につけなければならない。先に見学した、横地城や勝間田城には、シンボルではあっても、緊要地形としての価値が乏しい。しかし、同じ時代にあった丸子城にはその価値がある。

守護大名、そして戦国大名として成長できるものとできないものの違いの一端を垣間見た気がした。

## 駿府の庵－丸子城（その2）

城址を降り、泉の谷を一旦出て、稲荷神社の前を回り、静清バイパスの方向から城址がある三角山を見上げてみた。駿府から峠に向かう人も岡部から峠を降りてきた人もきっと見上げたに違いない。「御館様、そうっと通してくださいな！」という気がしてくる。

今度は、泉の谷の奥に入り、昔から気になっていた吐月峰で有名な柴屋寺を訪ねた。「ここかー！やっと来たぞー！」

なんと、この庵を結んだ連歌師宗長はあの今川義忠そして氏親に従えていたとのこと、そしてこの庵は、あの丸子城の一郭だったとのことだ。

とすれば、丸子城は城址のある山だけではなく、この泉の谷全部が丸子城だったということになる。なんと、大スケールがではないか！

その丸子城の一郭の庵の中の借景庭園から東の夜空を見上げたところ、竹林の山の向こうから月が吐き出されるようになってきたということか！

普段は、この平地部に住み、いざというときはあの山城に籠もるといことだろう。根古屋式だ。

庵の庭園の景色を楽しみ、歌をよみ楽しむというのは、京都の公家の文化と通じるものがある。気取っていたのか？治世のために利用していたのか？知性・教養・風流を身につけるためか？心を清らかにするためか？

庭園を出て解ったことだが、谷の中から周りの山々を見上げるとそこには四季折々の四周屏風が聳えていることが解った。おそらく、この庵から四周山々の景色を楽しむことが主要なテーマで、その一つに「はいふき（吐月峰）」があったということであろう。

氏親は駿府に戻ってもしばしば此処を訪ねており、財を投じて、庵から柴屋寺を築いた。やはり、戦塵を忘れようとしていたと思いたい。

「はいふきも 一興なりや 龍王郷」といった思いだったのだ。

ちょっとだけ、氏親の気持ちになれたような気がした。

“丸子城”そこは、やはり“緊要地形”

後年、今川家滅亡の後、武田家の山県昌景が城址に築城を加えて居城とし西側の徳川・織田に対する戦略上の要点とした。

今川の本丸から更に土橋、三の丸、二の曲輪を築いて、より城を強固に、そして街道に対する睨みを鋭くしている。

やはり、戦国大名として名をあげる者達は、それなりに賢い！

そして、徳川の太平の時代となると、廃城となった。その戦略的価値は必要とされなくなったということだ。

# 駿府の東域（その1）

愛宕山城から県道67号線を東進、鳥坂ICで国道1号線に入り更に東進し、東名清水IC入口を越えて庵原の信号を左折、300mほど北上して二俣道を東へ進む。正面に現れたお寺が大乘寺で、その直ぐ北側にある平山にかつて庵原城があった。身延山系から南に流れる山脚の内の一つでその南端に位置する。かつての興津筋（現国道52号線）が渡向から西に抜けて、清水に入る二つの筋の中間に位置し、これらを制している。東海道を直制するとは言い難いのは、蒲原城も同じ考え方で配置されたのであろうと考えられるからである。戦略的には重要性は十分ある。

草が谷に覇を示していたのであろう。この地の豪族庵原氏が築城したもので、庵原氏は今川氏の台頭とともにその配下となり重鎮として活躍する。義元亡き後、武田氏の駿河侵入に伴いその旗下となったあの掛川城築城で有名な元今川氏重鎮朝比奈氏が城番として大改修を行い守備した。勝頼の没落とともに庵原館で自刃するが、傍流は徳川に仕えて生き延びていった。

南への有効な視界を有しており、左手に興津の峰、南正面に清水の町並みと駿河湾、南西遠くに駿府の町並みを見通すことが出来る。地形は弱い。戦国の世ではあまり安心して眠れる城とは言いがたかったであろう。

駿府の東入口は、この庵原城、興津筋の興津城（横山城）そして興津の海岸へ突きだした山々が固めていたということになる。きっと興津の岬にも何かしら処置がなされていたはずだと思うが後の課題としたい。

庵原城趾を後にして、旧国道1号線沿いに次の目的地薩埵岬に向かう。その途中何か荘厳とした古刹が左手に見えたので、急遽、寄り道をする事とした。そこは何と一度は訪ねたいと思っていた清見寺ではないか。興津の岬下の海岸に位置している。昔は、波しぶきをいつも被っていたことであろう。起源は679年、1262年には鎌倉幕府が今の仏閣の基礎を築き、1362年には足利幕府が改修を行い、江戸時代には家康などに装飾を加えられている。宝満寺と同じソテツもあるから陰陽師とも関係があるということだろうか。島崎藤村が書いた五百羅漢もあるし、山下清の詩もあるし、歴史の語り部みたいなものだ。御本殿が改修中であるのでまた完成後に来ようと思い、薩埵岬に向かった。

旧国道1号線から国道52号線に入り北上して八木間の信号を右折東進、道が続いていることを信じつつ、ひたすら細い道を登っていくと登り切った所に展望台があり、ここから旧東海道の薩埵岬まで徒歩で行くことができた。薩埵岬の名前は、由比の漁師の網にかかった薩埵地蔵を岩木山に祀ったことに由来する。律令政治時代までの街道は海岸沿いしかなく、波の合間を縫うように渡っていかなくてはならない「親不知、子不知」の道であったということだ。まさに海道！

後、岬や山腹に道路が造られ、江戸時代には山頂沿い、山腹沿い、海岸沿いと3本の道路が整備された。ただし、海岸道沿いにしっかりとした道ができたのは安政の大地震で地形が隆起した後のことらしい。

薩埵岬の標識まで到着して後ろを振り返ると、歌川広重が描いた東海道由比の宿のそのままの世界が広がっていた。きらきらの深青の駿河湾が右手眼下に、正面遠くに蒲原町の海岸線、その先に蒲原・富士見の岬、そして富士山を見上げる。薩埵岬道は、興津宿と由比宿の間の3kmの岬道で比高差180m、沿道には、松や蘇鉄の他に梅、みかん、夏蜜柑、枇杷の樹木がたくさん植えられている。喉の渴きをいやせたのかも。過去いくたの戦舞台となったが、眺めは、素晴らしいの一言。

## 駿府の東域（その2）

今日は、十里木街道沿い（国道496号線沿い）から甲州街道見延筋沿い（国道52号線沿い）に御殿場から興津までドライブした。理由は、今川氏の駿府東部の支城である横山城、蒲原城及び善徳寺城の位置付けを自分なりに納得するためだ。以前、蒲原城を訪ねた時、『今川氏の支城だというのに何故、街道から奥まった所にあるのか？』という疑問を懐き、善徳寺城を訪ねた時には『何故、こんなに弱い地形に城を築いたのか？』という疑問を懐いたので、横山城もやはり同じだろうかを確認したくなったからだ。

十里木街道は、駿河、甲斐、相模をつなぐ重要な街道として古より利用されており、箱根竹之下（足利峠入り口）と富士宮を結ぶおよそ十里の道のりからそう呼ばれた。駿府と相模を結ぶ道は、他に東海道が在るだけである。

板妻から旧須山国道に入り、陸上自衛隊の東富士演習場の間を抜けていく。殺風景な眺めだが、気持ちの持ち方によってはこれが仙石原に見える。愛鷹山系を左手に見上げ、右手に冠雪の富士山を拝み、常緑の檜の山道を清々しく進む。十里木峠から下りになる。天気が良いのでドライブする人が多く、富士山が見えるところでは、記念撮影する人たちが必ずいた。粟倉で富士宮を見下ろしたが、ちょっと寄り道をして見たくなった。途中途中の道路標識に“白糸の滝”と記されていたからである。

国道139号線を越えて白糸の滝を目指す。国道139号は、富士市から朝霧高原を抜け、本栖湖へ通じている、その先は、上九一色村を抜け甲府へ続く国道358に接続している。この国道139号線の南終点付近に善徳寺城はあったのだ。いや、話をもどそう！

白糸の滝は、音止めの滝がある芝川と同じ水脈だと思われるが、地中の溶岩の層を流れ通ってきた水がその岩の隙間から流れ落ちるもので、他ではあまり見る事がない珍しいものだ。カーテンのように広がる滝は、高さ二十メートル、幅は百メートルもあり、手弱女ぶりで秀麗である。隣の音止めの滝が、落差25mの豪快な益荒男ぶりを見せているのと如何にも対比的である。音止めの滝の下の見学位置からは、白い顔でこっちを覗く富士山が見える。富士山は多彩な表情を持っているとつくづく思う。ここは、曾我兄弟の縁の地でもある。

寄り道を終わり、朝霧高原の麓の国道469号線を更に西に進む。日蓮正宗の山門を過ぎると道は狭くなり、長者・天使ヶ岳の南三脚を通過する道は、全くの山道であり、国道と言うのが訝しくなる。途中の桜峠から下りになる。

桜峠は、見延山を開いた日蓮も行脚したところであり、鎌倉から足柄峠を越え十里木街道を通りここ桜峠を越え見延路から甲斐へと思うと、その意志の強さに心打たれる。

稲子にぬけると道も広くなるが、ここは富士川沿いに下ってくる甲州路が十里木街道や3つの駿府への筋に分かれる極めて重要な地点だ。富士川は、笛吹川と釜無川が甲府盆地で合流し、富士山系と見延山地の間を縫いながら富士市、駿河湾へと流れ込んでおり、水量は多い。渡渉するには、難儀を極めると容易に想像できる。この富士川北側稜線に信玄の対今川防衛線である葛谷城があった。やはり信玄は偉い！

十島から富士川に架かる橋を渡り、やっと甲州街道見延路（国道52号線）に出た。もう少しで、目的地横山城だ！

## 駿府の東域（その3）

国道52号線に入って万沢トンネルを抜け、坂本から興津川の支流に沿って溪谷に行く。先の桜峠を抜けて稲子に抜けるまでの溪谷でも思ったのだが、この付近はとても温暖な気候だ。とういうのは、12月7日だと言うのにまだ、紅葉しており、落葉は始まったばかりの様子だからだ。住みやすそうである。仕事が出来なくなった後の候補地にここも入れておこう。

もうそろそろだな？これかな？と思いつつも、静岡県お手柄の史跡案内標識が何処にも見あたらない。コンビニで尋ねても解らない。ドラッグストア“ハック”で葛根湯を買いながら尋ねたがわからない。仕方がないのでこの辺だろうと思ったところに戻って、付近の人に尋ねた。確かに、昔、横山という地名だったらしい。が、横山城址は解らないとのこと。更に、あたりをつけた小山の近くに行ってミカンの収穫中の年輩の方に尋ねた。すると、「この山がそうだ。」と教えてくれた。さすが、愁伯！思った通り！戦術眼もなかなかだぞ！と一人で納得し、自己満足する！

国道52号線を南下して静岡市に入り、旧小島藩の領地を抜けようとするところで国道がぐーっと左に旋回したようになっており、その国道を制するように正面に急峻な小山がある。此処が横山城址（興津城址）である。

今は、ミカン畑と竹林となっており、頂上に登ることは出来ない。途中まで上って、南側を展望した。興津の町並みと駿河湾が見える。一旦降りて、ぐるっと北側に回ると、興津川に沿った谷地が北側の身延山南端山脚に遮られるまで見渡すことが出来る。まさに、地域シンボルであり、甲州街道身延路沿いに対する緊要地形ではある。しかし、緊要地形としての価値ならもう少し南のさった峠や興津峠の方が遙かに大きい。と思ったら、義元はさった峠に陣屋城を、更に西側の経路からの侵入に備えてか草ヶ谷には今川氏の配下となった庵原氏に庵原城を守備させている。

興津城は、もともと入江氏の一族である興津氏の居城で、ここ興津郷の地頭であったが、時代とともに力をつけていった守護今川氏にやがて被官することとなった。今川氏隆盛期には、あの柴屋寺で有名な連歌師宋長とも交友があったらしい。やはり、横地城や勝間田城と同じく地域のシンボルとしての価値を優先している城址である。

蒲原～由比～興津に至る地域は、古代からの東海道と南北の甲州路（身延路）の交差する地域であり、清水湊は東西の海上交通の避難港として、また、甲州・信州への中継港として賜わってきた。

南北の街道は、西から興津筋、由比筋、岩淵筋の3本あり、身延参りの街道であるとともに、江戸時代には、甲州から米を岩淵（現富士川町）～蒲原～清水濠～江戸へ送り、あるいは西国からの塩を甲州方面へ送るという重要な物資輸送路であった。また甲州から海への最短距離にあり、今川氏の力が弱まった後、武田氏が南下し進出した地域でもある。

こういう戦略的重要地点だからこそ、そして駿府東側の要点だからこそ、ここ興津筋正面に、今川氏は興津城、庵原城そしてさった陣屋城で強化したのだ。

さすが海道一の弓取り・今川氏だね！ 次回は、蒲原城！

## 駿府の東域（その4）

蒲原城は、南北朝の時代、守護今川範国の三男氏頼が築城したものとされる。戦国時代始まりの頃、伊勢新九郎が興国寺城から伊豆の韮山城の堀越公方足利茶々丸を攻めた際、当時の城主満氏は氏親の叔父新九郎に協力している。その後、戦国の激しい時代は氏徳が城代となっていた。

この城は、守りの者が常駐しているのではなく、平素は蒲原衆として、平地部の宿に住んでおり、有事になればこの城に入って戦うのだ。

やはり、強固な自然の地形を利用し、そこに人工の築城を加えて堅固な要害としている。南側は、絶壁で、眼下に蒲原の宿と東海道そして駿河湾を見下ろしている。ただし、弓矢の戦いの観点から言うと東海道を直接制しているわけではない。東海道から意識的に後退しているような気がする。

左手遠くには、伊豆の山々が霞んで見える。右手遠くには、さった峠が見渡せる。北側は、大丸山の山系を見上げることになる。地形的には、北側がやや弱いといえるが、本丸の北側に善福寺曲輪を設けてこれを補完しようとしている。本丸跡は、300坪位の広さか。

東海道を直接制するのであれば、蒲原トンネル付近まで南下するか、更に富士川東側や甲州街道岩淵筋へ睨みを効かすのであれば、現富士川サービスエリアがある岩淵まで突き出す方が適切であろう。

やはり、南北朝時代の守護としてのシンボリックな意味合いが強く出ているのであろう。

加えて、西側には由比筋がある。此処を通過されれば、この城の駿府に対する意味合いは無くなる。さった峠まで下がらなければならない。

もし、シンボリックな意味を持たせつつ、状況に合わせて必要なところに配置すると考えていたのならば、城に常駐していなかったことに合点がいく。

また、遠く東には、善徳寺城がある。今川義元たちが甲州、駿府、相模の三国同盟を締結したことで有名な善徳寺の西側に東海道の吉原の宿を制すように位置している。現在の日吉浅間神社がそうだ。これは、駿河今川氏3代の範政（蒲原城を築城した氏頼から見るとの兄の孫になる。）が築城したものであるが、地形的にかなり問題がある。遺構が残ってないため正確には断言できないが依るべき地形がない。特に、西側と北側はそうだ。

しかしながら、今川氏が力をつけ、駿河今川と遠州今川に分かれた後、駿・遠今川が更に力をつけて、地頭を配下に加え、守護請を盛んにし、東へ西へと国を拡大していった様子がわかる。

今川の大主人公氏親・義元は、これより4・5代後に現れる。

## 駿府の東端（東駿）（その1）

先に、足利の砦について記述した折りに大森氏と北条氏の関係についてほんの少し触れたことがあるが、今回から連続で御厨の戦国時代について記述する。

御厨地方の元々の領主は、鎌足・不比等を先祖に持つ藤原氏であった。その嫡流で、藤原氏の頂点を極めた道長との政争に敗れた伊周を祖父に持つ惟康が甲斐・駿河の国司に任ぜられたのである。

この惟康の嫡男長兄である親康が大森駿河領主となり、その親康の嫡男親家が大森氏を名乗ったことから大森氏が始まる。この大森氏の大きな流れはやがて、頼顕の時、上杉禅秀の乱での足利氏への貢献が認められて、転機が到来し、西相模及び駿東の領主に任じられ、小田原城主へと繋がっていく。

その支配地は、その後の藤頼→頼明→頼春→氏頼→藤頼（伊勢新九郎長氏から滅ぼされる）まで、小田原～小山～竹之下～深良の広大な地域であった。早雲の小田原入城後、小山～竹之下～深良に至る地域は、葛山氏と行動を続けたもう一つの大森氏の流れが、今川氏に組みすることで支配を続けていくこととなる。

一方、藤原惟康の嫡男親康の弟にあたる惟兼が葛山城を築き葛山氏を名乗ったことから、葛山氏が始まり、葛山～裾野～長久保の広大な地域の領主として、平安時代～鎌倉時代～室町時代そして、武田・今川・北条の力関係の中で翻弄された戦国時代の終わりまで、この地を治めることとなる。

さて、その戦国時代の葛山氏の安全保障戦略は如何なるものであったろうか？それは、小国故の、そして貴族故の政略、つまり、強者を利用し力の均衡の中に位置するか、あるいは強者の旗下に組みして時間を待つというものであったようだ。なぜなら、葛山城跡はあまりにも悠然としていて、断固たる戦闘を覚悟しているような強固な築城の跡が見られない。地形と築城がとても貧弱すぎる。加えて、鎌倉～室町時代は時の幕府に従順し、戦国時代には、今川氏と北条氏が親族関係の間はその両者と姻戚関係を結び、旗下というよりも同列の立場での独立を確保し得たものの、今・北関係を悪化させる義元登場後は今川氏とともに行動したため、義元没落後、織田・徳川を頼ることが出来ず、やがては武田氏を頼って没落したことをみれば、そんなものだと頷けるであろう？朝廷政治流なのだ！

葛山一族の城跡は、愛鷹山から東に流れる各稜線毎に、御厨平地に覇を示すように、北から、葛山城、千福城、大畑城、南一色城、長久保城等が残っている。

葛山系大森氏の城跡は、足柄山～箱根山系からや籠坂峠・三国峠からの侵入を防ぐように、そして、その地に覇を示すように北から、生土城、深沢城、大森城等が残っている。

各城郭の状況については、後日記述するが、「一国一城の主にはあらず。もはや戦国大名への気配がある。」とだけは、前置きできるかもしれない。



16年1月10日に葛山城を訪れた。御殿場方向からR246号を南下し御宿八幡宮を右折して、十里木に向かう県道24号線に入って北上し、御宿のバス停からそのまま直進し、東名高速道路のアンダーパスを通過していく。更に直進を続けるとまもなく、道路左手に根古屋式城郭の居館跡である葛山館跡と荻田・半田屋敷跡が現れ、右手には葛山氏の菩提寺仙年寺が見える。

付近の稲の切り株が残る乾いた田圃で村の人がどんと焼きの準備をしていた。その周りで子供達が駆け回っている。ふと、自分の小学校高学年時代の思い出が過ぎて微笑んでしまった。自分の当時の遊びと言えば、田舎に住んでいたため、春はソフトボールと釣り、夏はそれに加えて海水浴、秋は山の木の実取りか陣地取り遊び、冬は田圃の藁の上での体操ごっこだった。約35年前の幼少の頃の冬の遊びに重なったのだ。（今では更に55年前となってしまった。）

静岡のいろんな所を尋ねて気づいたのだが、愛鷹山系、身延山系そして牧ノ原丘陵等から流れ出る河川は稜線の間には谷地や扇状地を育み、そこには必ずと言っていいほどその土地毎に独自の生活・文化・風俗を発達させている。そして、城郭も必ずある。更に、この生活・文化・風俗の名残は、新幹線、高速道路、そして国道新バイパス等の盛り土で地域を分断された山側に色濃く残っている。その顕著な例が、丸子の里、花沢の里、葛山武の里である。まさにタイムスリップ！

自分の田舎では、どんと焼きは正月の神社でしていただくのだが、御国柄や土地柄によって違うのは当然であるから、葛山のどんと焼きが、昔の狼煙の名残りを伝えているような気がして、何だか自分だけの発見をしたようでちょっぴりうれしい気になる。この近くに仕事仲間が住んでいる。うらやましい限り！

仙年寺で葛山氏の系譜を確認した後、その墓地の左後方から葛山城に登った。階段が整備されていて、そんなに急でないために、登りやすく助かる。

葛山城は、愛鷹山から東に流れた丘陵の先端に位置し、東の急涯佐野川、南の大久保川に囲まれている。この付近の佐野川は、空海や役行者や行基が修行したとされる景ヶ島の景況でも知られるようにたいへん障害度が大きいのが、大久保川はそれほどでもない。また、山城全体の地形は北側を除きなだらかで、築城も今川や武田の城址に比して、全く見劣りする。戦国時代を席卷する武将の山城ではない。

しかしながら、西から南にかけては前方の稜線に遮られて短視界とはいえ、葛山の里に威を示している。また、北から遠くに富士山～愛鷹山～箱根山系そして御厨の平地全体を見渡すことが出来る。その視界の中には、大森城、千福城があり、この3つの城郭で御厨の最狭部をしっかりと護る態勢を造っている。さらに、南には、愛鷹山系から延びる顕著な稜線毎に、黄瀬川の西側沿いに大畑城、南一色城、大久保城が相互に視認できる範囲で御厨に覇を示すように整列して東に備えている。北には、鮎沢川の西沿いに、大森一族の神山城、高畑城、深沢城、天神城、生土城が、やはり相互視認できる範囲で整列し東に備えていたらしい。

一国一城城主の感覚ではない、戦略的な感覚が確かにある。

## 駿府の東端（東駿）（その3）

葛山城から佐野川西側沿いに南下して、途中、景ヶ島と屏風岩で河川障害度の景況を再確認しつつ千福城址に向かう。東名高速道路のアンダーパスを抜けるとすぐ左手に善明寺がある。その北側裏手の小山が千福寺城の跡だ。今は殆どその面影を見ることは出来ない。この小山は、愛鷹山山系の御厨地方に流れ出た山脚が佐野川の流れて分離されてできたものだろう。城址の西側は佐野川に依託することができ、東側から南側は佐野川の支流が城址を巻くように流れている。更に300m程東側には黄瀬川が流れており、河川障害度の大きな二つの川に挟まれた位置にある。しかも、御厨平地最狭部のほぼ中央に位置し御厨から十里木へ向かう県道24号の入り口を直接制している緊要地形である。しかし、地形的には北と南側はあまり強いとは言えない。

恥ずかしながら、かつて御殿場で勤務していたおり、週末の時々、遊技店に通っていたが、その一つがこの千福城址のすぐ南側にある。当時は、喫煙者だったし、義伯父の仕事の関係から幼少の頃から親しんできたこともあって、自由時間のかなりの時間を費やしていたと思う。しかし、昨年からの喫煙を止め、数年前から義伯父が病床の人となり昨年末他界したことも加わって遊技店にも行かなくなり、今は同じ近くの場所で我が町の歴史に親しんでいる自分を振り返って、今まで随分と無駄な時間の使い方をしてきたものだと反省させられる。

千福寺から国道246号に入り、少し南下して左前方に見える小山に当たりをつけて左折した。すぐに左手に裾野中央公園の看板が見えたが、目的地では無いので「五竜の滝は、此处だったのか。」と思いつつも、右手急涯頂上に向かい引き続き前進する。思った通りだ、この頂上に熊野神社があった。その向かって右手の山が大畑城址だ。ここは、やはり愛鷹山山系から流れ出た山脚の先端で北から東側を佐野川と黄瀬川に囲まれてその正面は自然の急涯となっている。その急涯の上に館を取り囲むように土塁を設けてある。土塁は北西側の愛鷹山系へと続くため、分断のための空堀を設けてある。城址と思われる平地の前に三日月型の堀の跡らしい窪地がある。武田氏が活用したのか？

ここも根古屋式で、城址の南側に居館があったが、南側は地形的に弱いためこの正面からの攻撃にはすぐに北にある城址に籠もったことだろう。

次の目的地に向かう途中、裾野中央公園に立ち寄り五竜の滝を眺めた。勇壮だが町中の側溝からの排水も流れ込んでいるため綺麗とは言えない。ちょっと寂しい。

更に246号を南下して、長泉町まで。南一色の信号（スポーツショップシラトリ）から西に入る。ちょっと狭くなるが、住宅地の公園の傍に愛鷹神社まで進む。ここから小川を挟んで南西に見える小山が南一色城址だ。

ここも、愛鷹山系から御厨の平地に流れ出る山脚の先端に当たる。私有地なので探索は断念。ただし、御厨平地への視界は開けているのは解る。地形的には、強くない。しかも、緊要地形としての価値はさほどあるとは思えない。

と言うことは、狼煙か？ここから南にある長久保城と先ほど行った大畑城や千福城との連絡のための地理的価値なのだろうか？

## 駿府の東端（東駿）（その4）

南一色城から国道246号に入り、再び南下。すぐに左手にトイザラスが見え、その前方に切り通しを挟んで左右に伸びる稜線が目に入る。この辺りかとも思いながら、城山神社を教えてもらうために西願寺付近の交番に向かう。ところが、ゼンリン地図が古いらしく、交番が無い！この付近の人たちのお人柄に期待しながら通りかかった年配のご婦人に尋ねた。やっぱり、この付近の人たちも駿府の人たちと同じだ。ご親切に、現地と古いゼンリン地図の両方で教えてくださった。最近、新しく再建されているとのこと。

教えていただいた方向に、頭に入れた地図の場所をめざすと、なんとその目的地は、トイザラスのすぐ南側の森、即ち、先ほど、気になった所だ。やっぱり！

城山神社の駐車場に入る前に慰霊碑のようなものが物が目に付いたので、駐車後まずそこへ向かう。靖国神社宮司松平永芳氏が書した「忠魂碑」があった。長泉町出身の英霊に対する慰霊碑だ。英霊と長泉の皆様に対し感謝の気持ちを込めてまた「人類が引き続き生存と発展を許されますよう」にお願いし、合掌する。

城山神社は、元々、長久保城の南曲輪に在った城の守護神で八幡様を祭っていた。その古の名残を示すかのように小さな古い祠が処々に祭ってある。今は、新しい神社が建立され、公園となっている。城址を偲ばせる物は残っていない。公園の玩具のような展望台から周囲を見渡すと、視界は開けていないが、昔は、北に愛鷹山系とその向こうに富士山、東の遠くに箱根山系、その手前から南東にかけて御厨平地から三島・沼津の市街地まで、そしてその遠くに伊豆の山々を見渡せる広大な眺めであったであろうことが容易に想像できる。

この神社の台をもう少し散策してみるとご近所の私有地に嘗ての空掘りや土塁を思わせるような地形が残っているのに気づく。他にないかと神社の台を下りて、この台脚の西側を北に辿った。国道246号のアンダーパスを潜って少し北に行ったところで桃沢川がこの台脚にぶつかる所がある。その台脚は急崖となり見上げると鉄筋の建築物がみえた。「うむ！あそこが本丸跡にふさわしい！」と思い、急ぎ来た道に戻り、国道246号に上る階段を上って台上に出て、先ほど見つけた建造物に到着するとそこは裾野北小学校（北小）だった。サッカーリトルリーグの試合中だったので校庭に入り先程の障害度を確認してみた。やはり、依頼するに頼もしい。続いて東が気になる。北小から約2～300mで台の東端に至る。南東には黄瀬川が台脚の東南端にぶつかり、そこへ流れ込む小河川が台の東側に障害と比高差を形成している。こうなれば、北側にはこの愛鷹山地から流れる稜線からの接近を阻止するための空堀を見つけたい。これがあれば、城郭の縄張りの検討がつくのだが。するとなんとすぐ近くのマンション駐車場の空き地の北側に除草がしてある土塁の跡のような梅林を見つけた。そこに上ると、すぐ北側は矢竹を植えていたのであろうか、竹林の空掘り跡があった。小学校の北側には見当たらないが、この台上の一番狭いところに構築してあるところを見ると間違いあるまい。この北側の土塁跡から南の城山神社までは国道246号を隔てて約300m、周囲は約1Km程あるだろう。広大な長久保城跡が目に見えた！そして、ここからは先程南曲輪で想像していた雄大な視界が当に広がっていた。

16世紀中ごろ今川氏と北条氏が河東一乱で覇を争ったはずだ。大発見者の気分！その戦いの前後、葛山氏の持ち城であった。

## 駿府の東端（東駿）（その5）

さて、これから、いよいよ、小山町と御殿場周辺だが、意気込んでみてちょっと寂しさが漂う。何故なら、葛山城より南は城址が比較的残っているのに比して、大森城より北の地域ではあまり残っていない。風聞によれば、大森城、神山城、出城山城、高畑城、深沢城、下古城、天神城、湯船城、生土城等と城は数多くあったようだが、城址として残存しているのは深沢城ぐらいだ。このように保存状態が悪いのは、たぶん、静岡県でこの地域ぐらいであろう。土地柄なのかな？

御殿場から旧246号を南下して、JR岩波駅の少し手前から湖尻峠に向かう道に入ってすぐに右折し三島に向かう道を前進する。すぐに急な下り坂になるがそこを下りると左手に急涯が現れ、深良中学校入り口の標識が見える。この標識に従って道を登っていくと、結構急な坂道を登った行き止まりのところに深良中学校はある。ここが、昔の大森城の跡らしい。が、遺構はまったく見当たらない。急涯の正面は比較的地形的な強度を有し、旧246号を岩波から深良一帯にかけて制しているが、東側の箱根山系に繋がる稜線は植生があるとはいえ地形的には弱く、空堀等をどこかに構築していなければあまり良い城とは言えない。確認できず残念。

校内に入ることはできないので正確な様子を伝えることはできないが、西北に遠く富士山、西方正面に蔓山をはじめとする愛鷹山から繋がる稜線、そして北西から西そして西南方向の目の前には御厨平地最狭部が望めるはずだ。しかしながら、緊要地形としての価値は、葛山城と千福寺城と一体となって初めてあるもので、ここだけで重要な緊要地形だとは言えない。戦国武将にはあまり魅力的ではなかったろう。

反転して、深沢城へ向かう。県道394号（旧246号）を北上して、御殿場市街地を抜けて小山町に向かう。県道78号との分岐点を左に直進していくと「久成寺は右」の標識が左手に見える。その三叉路右手のガソリンスタンドの先を右折して直進を続けると、その突き当たりすぐ左が深沢城の案内版である。

周囲に広大な視界を有するわけではないが、東の遠くに足柄峠、西の遠くに富士山、籠坂峠と三国峠、北は大胡田、遠くに湯船の山地、南は箱根の山々が確認できる。見渡しているのではなく、見上げている。つまり、見下ろされている。しかも、平城である。地形的な条件は分が悪い。しかしながら、その地理的な価値を言えば、すこぶる大きい。甲州や御厨から足柄峠～小田原に至る経路を押さえ、御厨から小山～小田原に至る経路を押さえている。だから造ったのだ。案内板には16世紀のはじめ今川氏が築いたとある。誰だかは特定されていない。

城址を散策する。案内板から馬だし曲輪、二の丸、袖郭、本丸と続いている。二の丸、本丸ともに300坪を越える広さを有している。城址の西から北側を馬伏川が、南東から北側を抜川が囲んでいる。比高差は10m以下だが急崖を形成している。西から南東側は地形的に弱いので二鶴様式の堀で地形を強化している。この築城と馬だし曲輪は武田氏の手が入ったことを示す。そうだ、信玄が「深沢城矢文」を使ったあの城かとやっと思出した。

風聞によれば大森一族の深沢氏が築いたらしいが、武田氏が活用するような戦略的な価値を有する城としたのは氏親か義元をおいて他にあるまい。

徳之一色城を強化させた意義と同じである。

入り口付近に明治12年行軍訓練中に歌った乃木少佐の歌碑があった。

## 駿府の東端（東駿）（その6）

いろんな資料を探しても生土城を詳しく説明している個所がない。その付近の乗光寺については大森氏六代の菩提所だという説明はあるのだが。しかし、この章を終了させるためにも、国道246号の城山トンネル付近が生土城址という記述を頼りに、今日は駿河今川にとっての最北、最東にあたる生土城跡に向かった。

須走から県道151号を東方へ下り、国道246号を越えて県道394号に入りこれを小山町に向かい更に下っていく。最初に乗光寺に向かう。不案内なため小山町の交番に道を尋ねに入る。私の車が他県ナンバーなのも手伝っているからだろうが、駐在所の若い警察官の方が丁寧に、一般的な道順だけではなくて道幅なども加えて最適な前進経路を教えてくださいました。深深と頭を下げ、お礼の言葉を伝えつつ、「寒い中お疲れ様！風邪等ひかないようにね！」と、つい普段部下に話し掛るのと同じような声を出しそうになった自分に苦笑いしながら交番を出た。小山の人もやはりいい人たちだ。

乗光寺は山中湖と丹沢湖の間に位置する三国山・不老山山系から南に流れる稜線上の鮎沢川に至る斜面にある。この付近の集落の菩提寺であろう。どの墓碑も小山町の谷間に正対している。子孫の将来を見守っているのもであろう。その一角の奥まったところに、大森頼明、その室、頼春、氏頼、実頼、藤頼の墓が残っている。小田原に入った大森氏の隆盛期をほんの少し偲ぶことができる。

この乗光寺から見渡せる視界は南側の盆地の範囲だけで、すぐ東から、小山と川西を繋ぐ酒匂川に沿う最狭部が続いている。国道246号沿いでもっとも機動に制限を加える地形だ。

この乗光寺から北西部に小河川を挟んで急涯の山がそそり立つ。そこが、生土城があったところだ。城址は殆ど残っていない。乗光寺からでは地形的な価値があまり分からないので、鮎沢川を挟んでの対岸や湯船入り口付近に回って観察した。生土城の城山は、東側を鮎沢川に注ぐ小河川に、南側を直接鮎沢川に、西側を野沢川に囲まれている。北側は、あの金時神社公園に繋がる稜線で不老山に続いている。北側も稜線が縊れているところを見ると空掘りの補強をしていたことが想像できる。中々の地形的強度を有する山城である。加えて、ここの戦略的な価値もきわめて大きい。小田原から小山に入る経路を直接押さえている。反対に、小田原側から見れば、御厨や甲州から小田原に抜ける経路を押さえてくれている。そして、小山や湯船一帯の地域にかけて完全に覇を示している。

これと同じような城址を嘗て訪ねた記憶がある。北条一族の新莊城である。酒匂川最狭部東に抜けると川西という地域に出るが、ここに丹沢山系から抜けてくる道が交差しており、その両道を制する位置に新莊城は在った。小山町から抜ける経路を押さえるとともに反対に丹沢や小田原から小山に抜ける経路を押さえている。当に、生土城と正反対の位置に同じ価値だ。元々は大森一族の居城であったのであろうが、伊勢長氏（後の早雲）に押さえられた後は、ここが北条の最西北端となったのであろう。今川氏親が長氏の甥にあたることを思えば、この生土城とこの新莊城の間に今川と北条の紳士協定線があったということだ。

そう、義元が生まれる前から新莊城～足柄城～山中城～韮山城～長浜城の緩やかな北条領ラインが存在したのである。その西が、不確かではあるが親今川領だったのだ。義元が死去の後には、泉頭城～戸倉城～大平城が確実に対武田のための北条ラインに加わったことであろう。

# 駿府の西域（その1）

今川氏の駿府の西の守りは、まず花倉城、続いて朝日山城、朝比奈城、そして徳之一色城、石脇城、花沢城等である。東の守りが冗長なのに比べ西側は比較的戦術的に合点がゆく態勢になっている。なぜなら、東には氏親の親戚筋に当たる伊勢新九郎が開祖となる後北条家が相模に盤踞して仮想敵国甲斐に睨みを効かせており、しかも武田は距離的に間隔があるのに比し、西には守護の時代からの仇敵である斯波氏等の一族がすぐ目の前に存在するからだ。そして、西へ拡大していくための足がかりを着実にする必要があるからだ。

今川氏三代目範国が足利将軍尊氏の命を受け遠・駿へ進出し、戦功により駿河・遠江守護職の任を与えられたことにより駿河・遠州今川氏は始まるが、当時駿河国内には南朝側の豪族が勢力を維持しており、今川氏の駿河経営は不完全なもので、文和元年（1352）今川範氏が大津城に拠る南朝側の佐竹・藁科氏を攻めこれを降ろし、大津城での仮住まい後、文和2年（1353）葉梨荘内花倉に居館を構え背後の山上に詰城（花倉城）を築いたころから、ここを拠点として駿河支配に注力できることになる。

花倉城は、氏家→泰範→範政と約60年間、今川の拠点となるが、駿府への進出は、駿府の北、安倍城に籠もる狩野氏らの抵抗を排除できた後となる。

範政が駿府へ本拠地を移した応永18年（1411）後も一族を花倉遍照寺の住職とし、堅墨花倉城を駿河の西の守りとしていた。

この花沢城は16世紀後半に、今川氏輝没後の今川義元と兄である花倉遍照光寺住持良真との間で起きた家督争い（花倉の乱）の舞台ともなったところだ。

この後、義元は徳之一色城と花沢城を築城することになる。

花倉城は、烏帽子形山の支峰、城山の頂上に位置する。この山脚は、東を半谷川、西を花倉川に囲まれながら葉梨の荘に延びている。この台脚の西裾に偏照寺、東裾に長慶寺がある。偏照寺は範国の嫡子範氏とその子氏家の菩提寺である。菩提に手を合わせた後、城山へ山脚台上に沿って向かうハイキングコースを登っていった。当初、お茶畑やミカン畑の中を歩いて緑と青のコントラストにじっくりしながら進む。しかし、目的地に近づくにつれ傾斜が急となり足が張ってくる。花倉城の案内板から上は、山道というよりは殆ど獣道で、かなりしんどい。往時を偲べると言えばそうだが・・・

一騎駆け～帯曲輪～二の丸～土墨・空堀～本丸～北の丸？～一騎駆けと続いている。偏照寺から約1時間の強行進だった。

今は植林で視界を楽しむことが出来ないが、花倉城跡はこの周辺では最も高く、四周に対する視界を有し、東方は遠く宇津ノ谷峠～焼津市街地と駿河湾まで視程を有していることが所々からの展望で理解できる。その他の方角は視程は諸処の山地のためにそれほど長くないが、朝比奈城や朝日山城との連携はとれたはず。駿河・遠州の霸王として威厳を示しつつも、地方豪族の弱さ故の防御重視の山城である。この城だけでは、勝間田城や横地城と意味合いは同じだ。しかしながら、その気弱さは家臣団の和を強要している。

彼らの居城は重要な地点に配してあるのだ。

下山して長慶寺に寄った。偏照寺に祭られている氏家の嫡子泰範が建てた菩提寺である。義元の補佐役雪斎禅師（臨濟寺の開祖で有名）が晩年再興した。

## 駿府の西域（その2）

藤枝バイパスの広幡ICを降りて、北上しながら左手前方にある山を目指してゆけば道路沿いに小さな手作り標識があるのですぐ解る。朝日山稲荷神社が朝日山城の城址に建立してある。麓では、城跡の一部の発掘調査中だ。

朝日山城は、平安時代末期藤原清綱が築いたものを室町時代になって、岡部荘の豪族岡部氏が更に築城を加え、詰城としたものだ。平素は麓の居住地に住み、有事には城に詰めるといふ所謂“根古屋式詰城”である。根古屋という地名がいたるところに在ることに疑問を持っていたが、漸く晴れた。ということは、興国寺城も詰城だったということなのだ。・・おっと、話を元に戻そう！岡部氏は、早くから今川氏に属し、歴代今川氏の重臣であった。

朝日山城は、潮山の東の支峰にある東西600m、南北200m、比高差80mの舟形の山城で、遠州から駿府に抜ける街道を直接制する朝比奈川西岸の仮宿に位置する緊要地形である。

今は展望台となっている元南曲輪から眺めると、前方南東方向に朝比奈川に沿って焼津市街と駿河湾が、左手前方遠くには伊豆の山々が、左手真横の遠くには青空に白く冠雪が生える富士山が、右手遠くには遠州の平地と水平線に牧ノ原台地が、そして左手からその後方にかけては宇都ノ谷峠に続く東海道と岡部の里が見渡せる。

また、潮山に隠れ、岡部の里に覇を示す城の位置はこの時代のこの地方の豪族等の城であったことを物語っている。やはり、横地城や勝間田城や蒲原城と同じ意味合いも持っている。

今は朝日山稲荷神社が建立されている城跡は、南から三の丸、空堀、土塁、二の丸、そして本丸と続いている。本丸の跡地は、約300坪位だろうか？山城にしては結構な面積を有している。3つの曲輪の周りは、急峻な断崖となっており、また南曲輪と三の丸の間を人工障害である空堀（堅堀）で分離させており、容易な本丸への侵入を防止していたことが解る。

神社入り口から登ると、断崖に張り付いたような急な坂をスイッチバックしながら上がって行かねばならず、急峻な崖であることがよくわかる。

この城から東海道を岡部の宿を抜けて更に宇都ノ谷峠を越えて東に行くとあの“古き良き今川の里：丸子”に通じ、さらには、今川氏隆盛時の行政庁駿府に繋がっている。

駿府という地形から言えば、宇津ノ谷の北側の経路も気になる。此処・北部志太郡にもやはり、今川重臣朝比奈一族が朝比奈城を構築し備えていた。詳細については、後日記述する。

しかし、これら花倉城、朝日山城、朝比奈城でも心許なかったであろう。義元は更に、花沢城と徳之一色城を築城した。海岸道正面の防御力の補強と遠州へ進出のための要点の確保のためであろう。

なかなかの戦略眼と賢さを感じる。絶対に愚鈍などではない！

## 駿府の西域（その3）

先に、記述した朝日山城の岡部氏は、今川家譜代の重鎮として、特に義元の首を居城と交換して持ち帰る美談等で有名であるが、もう一方の譜代の重鎮が朝比奈氏である。特に、掛川城主朝比奈3代として、泰熙（やすひろ）、泰能（やすよし）、泰朝（やすとも）が有名である。泰熙は、義忠・氏親・氏輝の3代に仕え、掛川城を構築し、遠州の曳馬城に斯波義連・大河内貞綱連合軍を撃退し、泰能は、泰熙の男子で、叔父泰以の後見の下、遠州三岳城に井伊氏のもとで再起を図った斯波義連・大河内貞綱連合軍を撃破し、のち義元に仕え、小豆城の戦いでは雪斎禅師とともに織田信秀を破った。泰朝は、義元逝去の後、武田に追われる氏真を掛川城に迎え徳川に抗戦し最後まで仕えて小田原まで供にした。臣下の模範のような重鎮達である。岡部氏と朝比奈氏の生涯を思う時、いつも目頭が熱くなる。

その駿河今川の譜代重鎮朝比奈氏発祥の地、朝比奈城が今日の訪問地である。

ところで、福岡、神奈川、愛知、千葉、東京、兵庫・大阪と勤務をしてきた小生にとって、静岡県は大変有難いところだ。水が豊かで美味しいからだ。伊豆や赤石山脈等から流れ出した静岡県の清流は、何と6水系（狩野川、富士川、安倍川、大井川、菊川、天竜川）・268一級河川に及ぶ。幼少の頃から、断水と不味い水の中で育ってきた小生としては、豊かで美味しい水の都は終の棲家になりたいほど。

その中で大井川水系に属し、安倍川水系の直ぐ西の山系ダイラボウから宇津ノ谷峠一帯の西を流れる鮎釣りを楽しめるほどの清流・二級河川朝比奈川沿い、志太郡岡部町殿地区に朝比奈城はある。西駿から駿府へ至る3経路の内、最北経路の入り口を制する要点で、朝比奈川が北～西～南へと曲線を描いて流れているちょうど屈曲部、県道209号線沿いの道の駅「玉の露の里」の東北側の城山がそこだ。道の駅の案内板に従って、万年寺～本丸址～善能寺のハイキングコースを歩いた。

万年寺を過ぎると直ぐに根回り8m、根張り30m、樹高30mの万年寺のカヤがある、歴史を記憶しているのだろうか。私有地だと思われるが、その茶畑の中を標識に従って行くと城趾に到着する。そこは、250坪ほどの広さしかなく植林のせいもあり視界は余り良くない。しかしながら、山全体の所々ではそれぞれの方向に対する良好な視界を有している。と言うことは、周囲からはこの山を見上げることになると言うことだ。地形的には余り強くないが頂上付近は急勾配になっている。しかも根古屋式。葛山城と同じ雰囲気だ。つまりは、山全体がこの地域のシンボルかつ室町時代からの豪族の詰めの城だということだ。看板が設置されているところは本丸址だと理解した方が適切であろう。

一山里の豪族では物足りなかったであろう、朝比奈泰熙が築いた掛川城は、遠州の平野部に周囲を見通せる限りの中心部に位置する平山城で、しかも周辺には、松井氏、天方氏、山内氏、匂坂氏、小笠原氏、久野氏、新野氏等の居城が存在し、掛川への侵入を阻止してくれている。東遠州の中核だ。

鎌倉幕府の御家人で室町幕府の駿河・遠州守護の今川氏が葉梨の荘に入った頃からの譜代重臣として、義忠とともに遠州回復に着手し、氏親とともに府中に入り駿河を安定させ、遠州を平定し、義元とともに三河切り取り、尾張を狙おうとした。

臣下には臣下なりの夢があったのだろう。夢は、男の生き方に輝きを持たせると痛感させられる。我が人生の反省しきり。

## 駿府の西域（その4）

今日は7月第1土曜日、梅雨の合間だ。6月は天候に恵まれず行脚していない。久々の史跡巡りである。付近は、相変わらず霞がかかっていたが、富士山麓は、すっかり初夏の様相だ。力強くも少々怠そうな深い緑のひといきれが充満している。

東名高速道路を西進し、相良・牧ノ原ICを出て、国道473号線を北上した。金谷までは牧ノ原台地の稜線を進む。いつも通り一面茶畑の中だが、最近の読み物のせい『ここも徳川家ゆかりの人たちが拓いたのかな？』とってしまう。赤石山脈が遠州平地へ流れる稜線はここ金谷でぎゅっと絞られて牧ノ原台へ広がる。金谷の急涯を降りて金谷町の町並みを過ぎると国道473号線は大井川西岸を大井川鉄道と併走している。大井川鉄道はSLが有名だが、主力は古いディーゼル車だ。幼少の頃見た田舎本線のディーゼル車を思い出した。少し行くと、大井川鉄道は川の東岸を走っていく。国道473号線は古い道らしく、トンネルの少ない山道といっている。つまりクネクネ道が多いということ。『長女が乗っていたらまちがいなく嘔吐していたな。』と苦笑い。大井川の東岸沿いが新しい道らしく交通量が比較的多い様子が遠くに見えた。情報収集不足でした。残念！

しかしながら、視界が開けたところからは、大井川のゆったりとした流れと大きな曲線が彼方此方に人々に生活の基盤を与えてくれたことを確認することが出来て、悠久の自然の営みにまたまた感謝感謝の気持ちが湧いてきた。合掌！

仮住いを出発して凡そ3時間で中川根の小長井城趾に到着したが、今回も当然ながら途中で道を聞くこととなった。駿河徳山を過ぎて暫く行ってもPG海洋センターと言う目印が見つからない。ミニストップに立ち寄って、店員さんに聞いたら、別の店員さんを呼んでくれて、その人が丁寧に教えてくれた。「この道を左手に真っ直ぐ行って、突き当たりを右に行って、ずーっと真っ直ぐ行ったらトンネルがあるから、そこを通過してまだ真っ直ぐ行って、右に静岡と書いてある看板の所を右に曲がって、そしたら直ぐに右手にPG海洋センターに登る道があるから、そこを登っていったら着きます。」といった具合に！時間的な尺度は無く少々不安だったけど、その通りに走っていったらしっかり着くことができた。『有難う！』と心で呟いた。やはり、日本人だよ！仕事している甲斐がある。このところ、各地で道を尋ねるのも一つの楽しみになってきたのかもしれない。

小長井城は、遠州森野と駿府を結ぶ国道362号線の最北部に位置し、北は奥大井、南は大井川に沿って牧ノ原へ続いている。室町時代、土岐氏の一族、小長谷氏によって築かれたとされる。室町時代から小長谷氏は駿河守護今川氏に属していたとされるが、戦国時代、今川氏が没落すると甲斐武田氏の統治下に置かれた。

三河から遠州平野部を避けて駿府に至る迂回路を制する要点であるため、東海道を西進する氏親にとってここを開けておくことは、三河・甲州方面から府内への直接侵攻の隙を作ることになり、是非とも押さえておく必要があった。小長谷氏には守城を期待していたのであろう。今川の勇将としての活躍記述はまだ目にしていないことにも納得がいく。本丸は4～500坪ほど有り徳谷神社が建立されている。西に向かって低くなりつつ、二の丸、三の丸が続く。城の北～西～南は大井川の急涯河岸段丘と鳴沢川で護られている。東は、深い森の高山へ続いている。小長谷氏の城は領地に覇を唱えるシンボリックの意味合いもあり、大井川街道沿いに向かって聳えていたはずだ。東の人工複合堀と複合馬出曲輪は武田氏の築城に間違いがないが。

## 駿府の西域（その5）

国道150号線を焼津方向から用宗方向に向かって走り、日本坂トンネルに入る直前を左折して花沢の里に向かい前進する。花沢の里は、小さな泉の谷の里（丸子の里）といった感じで、周りを山で囲まれた落ち着いた静かな里である。丸子の里もそうだが、すぐ近くに大きな主要幹線国道が通っているというのに喧騒さはまったく無い。ほんとうにいい気分、うれしくなる。

駐車場が無いので、里の入り口で車を止め徒歩で移動した。すぐに、無人八百屋さんでみかんを並べていた里のご婦人に花沢城跡の場所を尋ねた。思ったとおり目の前の小山だったが、其処までの道順を丁寧に教えてくれた。

ここもやっぱり暖かい。12月13日だというのに紅葉真っ盛り！ソテツもある。四周の紅葉屏風に心和ませながら歩いてゆくとそれほど距離は無いのだが、高崎の里と花沢の里を結ぶ街道の花沢の里の入り口に当たる峠から山を回るようにして登ることになり、城跡の山に到着する頃は体もあったかい。山頂に近づくにつれ、岩肌が目立ち、下を覗けば急峻な崖で、断崖絶壁の様相が増していく。駿河一帯に戦国時代以前から散在する山城に共通な自然の要害にここ花沢城も聳えていた。

花沢城跡の石碑からは、正面には国道150号線（旧府中道）、JR東海道本線、駿河湾が、右手には小坂越え道に続く旧街道、その遠くには焼津の市街から牧の原台地（吉田城の狼煙も見えたであろう。）が、左手には、花沢の里が見渡せる。花沢の里後方は宇津ノ谷峠に続く小坂超え道が縫っている山並みが続いている。

すぐ前にもうひとつの峰がある。おそらく出丸か何かの処置をしていたであろうが、ここからは、更に前方への視界が開けている。

街道を直接制し、花沢の里の入り口を制すまさに、緊要地形でもある。

丸子城や朝日山城と同じだ。

ここ花沢城は、地方豪族が築城したものではなく、今川義元が花倉の合戦後に、駿府の西を守るために、そして遠州への足がかりとするために、徳之一色城とともに築城したものだ。初代城主は今川氏一族の関口越後守氏録である。以前御殿場で勤務していた時に、関口という同僚がいた。とても、いい顔つきとスタイルを持っていたので、“ご先祖はお公家様ですか？”と話していたことを思い出すが、あながち誤ってはいなかったのかと思えてきた。

花沢城の南の石脇に、伊勢新九郎長氏が一時期詰めていた石脇城がある。今は、殆ど遺構は見あたらない。また、花沢城から東に日本坂トンネルを抜けところのJR用宗駅の北側にある城山という小山に持船城址がある。今川氏の属将、一宮左兵衛慰元実の居城跡である。武田氏の時代は武田水軍の拠点となった。今は、廃墟となった観音堂が物悲しく残っているだけで静岡県の城址としては珍しく荒れ放題になっているらしい。・・・

駿府への西からの二つの進入経路上には、それぞれの入り口と出口に複数の城を築き、防護していたということだ。西への意識が分かる。

お次は、徳之一色城だ。

## 駿府の西域（その6）

徳之一色城跡！今は偲ぶことができない。今、其処に残っているのは田中城である。家康が没する直接の原因になった鯛のてんぷらを食べた所だ。

田中城は、義元の没後、駿府・遠州に侵攻してきた武田信玄が、滅ぼした徳之一色城の跡地一帯にこれを拡張させて、馬場美濃守信房に築かせたもので、完成後は山県三郎兵衛尉正景に居城させた。（二人とも、遠州・駿河における武田方の武将としてよく耳にする有名な名前である。）

武田の築城はいつもすばらしいと感心させられるが、ここもまた“へーっ！すごいなー！”である。亀甲城とも呼ばれるように、本丸を中心に二の丸、三の丸がその周囲を巡る同心円形状の城郭で、丸と丸の間は六間川の水をひいた堀が障害を形成している。本丸は現在、西益津小学校となっている。正門の右手に往時のミニチュアが設置してあり、静岡県のご配慮にまた嬉しくなる。ここでは、馬出し曲輪よりこの同心円状の城郭そのものが特徴だ。信玄は、ここに遠州進出の足がかりを設けた後、小山城、諏訪原城等と拡張して行った。

一方、探していた徳之一色城は、少し離れた所の田中城下屋敷跡に存在していたらしい。現在は、江戸時代後半の田中藩主の庭園を復元させてある。田中城本丸櫓、茶室なども移設してあり、一見の価値はある。見学料が無料というのもまた静岡県に感謝・感謝だ！

徳之一色城は、今川義元が花倉の乱の後、駿府の西を守り、かつ遠州への足がかりとするために、花沢城とともに築城させ、長谷川紀伊守正長に居城させたものだ。しかしながら、先に述べたとおり、義元の没後、信玄の侵攻により、“徳之一色城”は短い使命を終える。

この地は、遠州からの街道が、用宗へ向かう海岸沿いの府中道と丸子へ向かう東海道へと分岐する要点である。所謂、緊要地形だ。

山城のように天然の要害を利用することはできないが、その重要性ゆえに、六間川を活用しつつ人工的に障害度を強化させて、築城したものだ。

これまで見てきた今川氏の城郭即ち、戦国時代以前から存在していた城郭とまったく意義付も築城に当たっての着想も異にする。地方豪族が領主としてのシンボルとした意味合いは薄く、戦略的な必要性から作られたもので、領地を拡大していく戦国大名の支城である。

いよいよ戦国大名今川義元の登場である。この徳之一色城、花倉城から、小山城、掛川城、高天神城、二股城等そして、三河から尾張へと勢力を拡大していくこととなった。

しかし、三河の入り口までは、すでに氏親が制していたのだ。

# 駿府から遠州へ（その1）

国道150号線を焼津から大井川を渡ったところで県道34号線に入り北上するとすぐに左前方に牧ノ原から延びてきている稜線が見え、やがて復元された天守閣が見える。これが小山城址である。安倍晴明がシナから持ち帰ったと伝えられる国定天然記念物の大ソテツで有名な能満寺はこの小山城の南東麓にある。

小山城は、牧の原台地の金谷から坂口、吉田町へと流れている稜線の台端に位置し、稜線上を辿れば牧ノ原台の中心金谷に、更に東海道を西に行けば掛川城に至り、海岸道沿いに西に進めば相良から塩買坂をぬけて小笠町から高天神城に至ることが出来る交通の要点である。

この小山城址には、武田一族の勇将馬場美濃守が築城をする前、今川一族の山崎の砦があった。氏親から義元の時代に誰が居城していたのかは分からないが今川の遠州進出への地歩である。しかし、その一步は、更に先代の義忠が残したはずだ。義忠が、応仁の乱で西側の斯波氏に与した勝間田氏や横地氏を攻めた時、必ずここを足がかりとする必要があるからだ。なぜなら、ここから南に見える稜線を越えれば、すぐに勝間田の所領に至るだからだ。

勝間田城は以前に訪ねたことがあるので、今回は、国道150号線を更に南下して浜岡町から県道37号線を北上し新道付近から県道244号線を東進して牧ノ原台地に入る。

この244号線は県道69号にそのまま連結し入ってすぐに正林寺がある。勝間田、横地の豪族を打ち破り、凱旋途中に残党に不意を付かれた義忠の墓碑がある。小さな祠の中に小さな塔の墓石で祀られている。

正林寺から県道244号線にもどり、南下する同道を2Km程行くと道が大きく左に曲がっていく。このとき左手に見える平山が八幡平の城址である。そして右手前方に見えるのが舟ヶ谷城址である。小笠正面に対して牧ノ原台から流れる稜線としては南正面第2線となる。視界はいずれも四周に対して短視界である。舟ヶ谷城は室町時代、新野氏の詰城であった。八幡平城は、舟ヶ谷より地形的に強い八幡平に武田氏が舟ヶ谷城に接続して築城したものらしい。今川氏がどのように利用していたかは不明であるが、西へ拡大して行き掛川城や高天神城を手中にしていたのならばあまり利用価値は無かったであろう。

更に県道244号線を東進し、閑田院を越えたところで県道242号線に入り南下する。約2Km程進むと正面に稜線が見える。この平山の中に朝比奈城がある。小笠正面に対して牧ノ原台から流れる稜線としては南正面第3線である。武田氏が築いたと言われるが、八幡平の城～舟ヶ谷城～朝比奈城で小笠正面からの塩買坂南側の侵攻を防ごうとしたのだろうか。反対に同正面への侵攻の足がかりとするには西にあるもう一つの稜線が邪魔になりやや価値が低い。

そのまま南進して県道37号線旧道を北上し、大きく左に曲がる中尾の手前左手の平山が釜原城址で、更に県道を外れて少々直進したところの左手の平山が高橋氏の天ヶ谷の城である。小笠正面に対して牧ノ原台から流れる稜線としては南正面第1線である。築城跡から見れば武田氏のものと思われる。西方への視界良好。高天神城も見えたはずだ。ここなら、南正面第1線かつ攻勢の支とうとなるが南翼が地形的に弱い。

武田は状況に応じてこれらの5つを使い分けていたのであろうが、西に進む今川にとっては新野氏の城だけで十分だったであろう。

## 駿府から遠州へ（その2）

古の塩の道県道69号線を正林寺から西進し、県道37号線との交点から北上すると直ぐに緑の小山が正面に見えてくる。案の定、この小山が堤城址である。小笠町下平川字堤、バス停城山下前、バイク販売店奥の平山である。小笠平地の中央部に向けて流れている牧ノ原台地からの稜線の最西端に位置し、南西から北にかけて牛淵川に囲まれて、眼下には南から北に向かって塩の道が続いている。交通の要衝を制し、天然の地形障害を活用でき、西方の平地部に対し良好な視射界を有するまさに緊要地形で、中第一線部隊が守備する戦闘陣地の前縁もしくは戦闘前哨に適している。ここの城を築いたのは松井左衛門尉信薫で今川範国の家臣である。中先代の乱等においての活躍が認められ葉梨の荘からこの下平川郷を与えられた。その後も松井氏が相続したようであるが、氏親の時、松井山城守は1531年に一旦この下平川郷を与えられたものの、翌1514年にはその活躍により二俣城に栄転している。松井氏は、その後、宗信、宗親、助近と二俣城主を勤める。

ここから、西に見通したところに高天神城がある。元々は、範国の二男で遠州今川氏の祖、文武両道の俊才、今川了俊が築いたと言われている。高天神城は、武田と徳川の攻防で有名であるが、それ以前は今川の遠州の要だったと言う説もあるらしいが・・・？ 何となく気乗りがしないので今回は訪問しないでおく。

県道37号線を北上して菊川ICから東名に乗り掛川ICで降りて、以降道路標識に従って進めば掛川城址に行き着ける。

掛川城は、関ヶ原の戦いに向かう東軍に山内一豊が明け渡したことで有名であるが、元々この地の豪族鶴見氏が砦を築いていたものを氏親の祖父義忠が重鎮朝比奈泰熙に命じて城を築かせたもので、義元の没する前まで、遠州支配の拠点であった。義元の死去に伴い家康から追い立てられた嫡男氏真是、朝比奈泰朝を頼りこの掛川城に一時期身を寄せるが5ヶ月の攻防の後開城を条件に和議となり氏真是は北条氏を頼って戸倉城に向かう。残された朝比奈氏は徳川の家臣となる。

現在の城郭は1994年に再建されたもので、御殿は1972年から1975年にかけて保存修理されたもの、姫路城ほどではないが往時の状況を垣間見ることが出来る。天守閣から見渡せば、東遠くに富士山、東から南東にかけて牧ノ原台地、南遠くに小笠丘陵、南眼下には逆川と掛川の宿と旧東海道、西には遠くに磐田丘陵その手前に天竜川東岸に沿う一連の緑の台脚、北は赤石山脈の大日山系が見渡せる。なるほど、緊要地形でしかも掛川平地の主としての覇を示す場所である。しかしながら、平城であるため、城の周りに、松尾池、三日月堀、十露盤堀及び乾堀等の人工障害を築き地形強度を高めていたことが分かる。いつの頃からなのかは分からないが、気持ちは良くわかる。

ところで、この地に義忠が目を付けたということは少々の驚きである。これまで、戦略的な思考は氏親以降のものだと思っていたが、義忠の時から既に一国一城の主的思考や一所懸命思考から脱却して、拡張主義的戦略思考が始まっていたということだ。戦国の雄、海道一の弓取り今川は、義忠が着手し、氏親が拡充し、義元が完成しようとしたということか？

## 駿府から遠州へ（その3）

掛川城から国道1号線を西進して3Km程で県道40号線森方向の道路標識が見えてくる。この標識に従い右折して天竜浜名湖鉄道沿いに北上すると周智郡森町に入る。福田地の交差点を右折して県道58号線に入り更に北上すると両側に山並みが見えてくる。この地方の豪族山内氏が、かつて収めていた土地だ。その支配地は遠州平地へ流れ出る赤石山脈の山脚を太田川が切り崩した扇状地一帯であったと思われる。山内氏はこの地に、戦国時代直前の地方豪族に同じように見られる城の配置をしている。

県道58号線をそのまま太田川沿いに北上して行くとこの58号線が一旦川沿いから西に離れて北上し今度は三倉川を渡る元関橋に到着する。ここから春野町に向かう道と川根町へ向かう道が分岐する地点で、反対に言えば両正面からの合流点で所謂交通の要衝に当たる。この橋の南西約400m程のところに谷本神社がありその西側の稜線がこの橋の直ぐ西まで迫り出している。ここに天方城の出城白山城があった。分かりづらいが民家の間の軒先を抜けるように上がっていくと赤い鳥居がある。地元の人が言うにこの付近が出城と呼ばれているところらしい。遺構は良くわからないが天方城の城主からみれば押さえておきたい森荘の北の入り口である。

元関橋から反転し県道58号線を南進して約2.5Km程戻ると向天方方向への標識があるのでここを左折し太田川を渡るとすぐ天方城址への案内標識がまたあるのでこれに従って進む。麓から約2.5Km程で山頂とあるが道が非常に狭いため対向車が来ないようにと願いつつ車を走らせた。山頂は城ヶ平公園となっており家族連れが遊ぶような場所であるが、天方城址としても、その遺構をしっかりと整備してある。ここを麓から徒歩で登ってきたとしたらあの花倉城の場合と同じだなどぞっとする。狭いけれども車で登れたことに感謝。

今は植林であり視界が開けているとは言えないが、太田川に沿う森荘を一望のものとするのができ、この地の主としての覇を示すには十分だったはずだ。ここには、500坪はあろうかと言うほどの広大な曲輪跡地と空堀等が残っている。元々山城対馬守の居城であったが、南方の飯田城を攻略しそこに対馬守が移ったため、爾後その弟山内山城守の居城となった。爾後天方姓を称していく。戦国時代を迎えたころの城主天方山城守通興は今川の勇将として名高く、今川義元の没後も家康を散々悩ませた。しかし、如何せん多勢に無勢、二度に渡る反抗も力つき、やがて屈して配下となっていく。

天方城を降りて県道58号をまた南下、県道81号線との交点を少し南下すると左手に飯田郵便局がある。そこを左折して直ぐに町道を左折すると宗信寺の案内標識があるのでこれに従って、公民館の左手から右へ右へと上がっていくと山頂の宗信寺にたどり着く。すんなりと到着できた筈は当然ある分けがない。地元の方に訪ねた。やはり丁寧に教えてくださった。有難い。駿河の人も遠州の人も暖かいね。

飯田城はこの宗信寺の東側の山頂付近にあった。西には太田川に沿う広大な平地と磐田丘陵が広がっている。北は先に行った天方城へ続く山脚が続いている。東は掛川の西の平地部と原野谷川に沿う稜線が見える。南は太田川に沿う肥沃な平野と南東遠くに小笠丘陵である。山内氏はここに居城して約170年覇を示したが、家康に攻められ廃城となった。宗信寺の案内板によるとその子孫は三河に今も続いているとのこと。そう言えば、豊橋市周辺にも、昔大変お世話になった方をはじめ、山内氏は多くおられた。

## 駿府から遠州へ（その4）

宗信寺から再度県道58号線に出て南下し、可睡斎の標識を過ぎて東名高速道路に至ったところで高速道路の側道を東進する。途中道がやや狭くなるが直ぐに広くなり、大きな久野城の看板が目に入る。綺麗に草刈りがしてあり、横地城祉や山中城祉と同じように手入れが行き届いている。曲輪址も整然と残っている。しかしながら、戦術上の魅力は小さく、地形的にはそれほど強くはない。

久野城は、周りを水田に囲まれた標高34mの丘上を主郭として築かれたもので雨期には水面に浮かぶ要塞の呈をなし、別名蔵王城とも呼ばれた。代々今川氏の家臣だった久野氏の居城で、宗隆が初代城主である。宗隆の孫である久野元宗が今川義元に従って桶狭間合戦で討ち死したことは知られていると思うが、永禄三年（1560）、その今川義元の没後、兄元宗に替わって久野城主となった久野宗能の方が知名度は高いのかも知れない。宗能は、永禄十一年（1568）徳川家康に通じ、武田方の秋山信友軍を退け、翌年、掛川城の今川氏真に味方する同族を破り、元亀三年（1572）には押し寄せた武田軍に抵抗して城を守った上、更に、高天神城攻略戦や小牧・長久手合戦でも功を挙げたため天正十八年（1590）の家康関東移封においては下総国佐倉一万三千石を与えられることとなった。

久能城址は、赤石山地から太田川の東側に沿って袋井平地に流れ出ている山脚、即ち、天方城址や飯田城址がある同じ稜線上の最南端に位置している。曲輪址から展望すると、西方正面に袋井平地と磐田丘陵が、南方には太田川と原野谷川に囲まれた肥沃な袋井平地が、その東には小笠丘陵が、そして更には原野谷川を越えて続く国道1号線と東名高速道路の先に掛川の市街地を見通すことが出来る。

なんと、掛川一帯の西側を掩護する重要な地形ではないか？戦術用語で言う戦闘前哨や戦闘陣地の前縁に適するような地形だ。東後方の原野谷川東側の地形もこれに適するとは思うが。

来た道を県道58号線まで戻り、また南下する。袋井市街地に入ったところで右折し県道413号線に入り、川井東で左折して県道41号線に入り更に南下を続け、浅名北を右折して浅岡バス停の直ぐ先の中地区に入る。ここがかつての馬伏塚（まむしづか）城址である。馬伏塚城址は、住宅地となっている田圃の一画にある。南側からの地形は田圃から2～3m程高くなっているが、全くの平城で、どうしてこの地が選ばれたのか不思議だが、現地案内板をよく見ると、馬伏塚城の南から西にかけては「深田」と記されており、沼地の中にあつたらしいことがわかる。なるほど葦の沼が周りに残っている。文亀元年（1501）に遠江国守護斯波氏と駿河国守護今川氏が遠江の支配権を巡って中遠地域で戦っていた時、先の座王城や天方城と共に今川氏の拠点として登場していた。城主として確かな史料に登場する最初は、今川氏の重臣で遠江小笠原氏と呼ばれる小笠原春茂（春義、春儀）とその子の氏興（氏清）であり、高天神城（大東町土方）の城主も兼ねていたとされる。

今川氏が滅亡すると、小笠原氏は徳川家康の配下となり家臣として活躍することになる。馬伏塚城は、天正2年（1574）6月17日、高天神城が武田勝頼の手に支配が移ると、家康の作戦本部となり現在の岡山集落全域を取り込む城郭として築城されるが、高天神城の獲得に伴い廃城となった。さもあるう。

## 駿府から遠州へ（その5）

今川隆盛時代の遠州の城の在処を見ると、掛川城を中心に4時方向から時計回りに持舟城、堤城、高天神城、馬伏塚城、久野城、飯田城、天方城等が掛川城を取り囲むように配置されていることが分かる。まるで戦闘陣地の前縁のようにである。そして、その西には、同じように、天竜川の東側の磐田原台地に二俣城、社山城、匂坂城が、また更に西側に浜松城が並んでいる。

今川隆盛時代の遠州の中心は掛川城だったはずだ。間違いない。

昨日から今日は出かけると決めていたので、4月3日、遠足前の子供のように0540に目が覚めた。いつもは朝起き上がるのにたいそうな決心が必要なのに。腹ごしらえをして早速出発。目的地は戦闘前哨地域だ。御殿場ICから東名高速に入り南下、チラホラと桜の花が目に入る。あー春だな。仮住い付近はまだ冬だけど。それに淡い緑の季節が始まっている。何もかも生きていて感じて素敵だな。

袋井ICで降りて県道61号を北上、深橋を渡って左折し県道374号線方面へ向かう。この付近はすでに田圃づくりが始まっている。長閑だな。こんな風景のある日本の自然とこんな自然とともに暮らしている人々のためなら、頑張っていけると思う。それに比し、都暮らしや官庁お役所勤めはなんともウンザリさせられると思いつつながら。

県道374号線へ入るとそこは既に磐田丘陵。台上は牧ノ原と同じで一面の茶畑。その中を真っ直ぐ西へ向かい台端へ至る。よく見ると西端の崖は急涯で、前方の西方に対して天竜川から遠く奥浜名一帯が一望できる。しかも、浜北から袋井に抜ける要点である。この付近がかつての匂坂城趾らしい。国人領主匂坂氏の居城で、匂坂氏は今川氏の台頭に伴いその傘下となり名声を馳せた。義元没後は徳川の配下となるが、同城は信玄の遠州侵略後落城した。昔、戦術考察でこの天竜川を正面にした磐田丘陵を使った広正面防御について考察したことがあるが、結局、難しかったことを覚えている。地形的に弱かったのだ。

匂坂を西へ下って県道44号線を北上する。右手には暫く磐田丘陵が続いている。「この地に覇を示すシンボルを連ねたい。」という気持ちは解るような気がする。北上を続け豊岡から県道61号線に入り森へ向かう。磐田台地への西側は急涯を形成しているが東からでは障害度は無きに等しい。

社山城趾は慈眼寺南側の山にある。森から磐田から浜北へ向かう交通の要点を制している。本宮山から流れる山脚が一旦切れたようになる地点にある標高300mの平山の頂上に城趾はあった。曲輪趾と思われる頂上の平地部は400坪ほどの広さで周囲は完全に急涯を形成しており、匂坂城趾に比し地形的な強度は格段と高い。本丸やその他の曲輪と思われる所からの視界をも入れるとこれも匂坂城に比し格段と優れており、北は峰の続きで短視界だが、東は森の村落と遠くに牧ノ原の丘陵が、南は県道61号線と磐田丘陵の稜線がどこまでも、西は眼下に天竜川と浜北の平野が見通せる。社山城別名水巻城の築城は、平安時代に藤原友実の長子匂坂十郎規実が行ったが、その後11代の長能の時にやっと匂坂城主となったと一説に伝えられている。義元亡き後、武田氏の手の中となったこの城は、信玄の三方が原台地進出及び二俣城攻めの拠点として利用された。先の匂坂城の支城とも伝えられるが私なら此方の城の方がよい。よく見ると、西に対しては急涯地形を活用して遠距離からの防御が、東に対しては逆八陣地を活用して近距離不意急襲的な防御が出来るように構成されているからである。頂上にある社神社にいつもの御願いをして下山した。

## 駿府から遠州へ（その6）

社山城を下山して再び県道44号線を北上する。天竜市から国道152号線に入り南進するとすぐに二俣城への標識が見える。右折して、直ぐの坂道を上ると駐車場が右手にあるのでここに車を止めて二俣城に向かう。登っていくとセンサーがあるのだろう、アナウンスが入り簡単に二俣城に纏わる歴史を説明してくれる。

周知の通りで、家康の夫人築山殿と信康が武田氏と通じたとして信長から実の子の自刃を命じられ自害させた場所として有名な所である。

1500年頃に斯波氏家臣二俣昌長が築城したが、その後今川氏の台頭に伴いその配下である椎名（朝比奈）氏や堤城から移封された松井氏が居城することとなる。義元没落後は徳川支配下の鵜野氏が守備した。一旦武田氏に取られるが、長篠の戦い後に徳川氏が奪回した際はあの大久保忠世が入城している。甲州や東遠江を結ぶ塩の道や浜名や三河へ続く経路が集約するところで交通の要衝である。

二俣城を囲む景色は、まさに風光明媚といった感じだ。何と言っても春の日射しを輝かせながら蕩々と流れる天竜川の眺めがすばらしい。東は二俣川、北から西にかけては天竜川、南は鳥羽山と更に天竜川で囲まれた標高90m、周囲が急涯という天然の要害頂上に曲輪址はある。しかしながら、説明板に他にも城跡があったようだからこの二俣城だけでなく隣の鳥羽山にも同じような城趾があるだろうと思い、訪ねることとした。

鳥羽山城は、天竜川が大きく北～西～南へ旋回するその旋回軸にちょうど位置している。頂上には憩いの広場があり展望台もある。ちょうど花見の季節で家族連れの市民で賑やかである。この展望台から周囲を見渡せるが、南への視界が抜群にすばらしい。天竜川がその流れを南に変えて遠くに流れていく。天竜川の西は遠州灘まで一面の浜名平野である。天竜川の東側はこれに沿うように磐田丘陵が霞んで見えなくなるまで南に続いている。この景色を前に、信康も手をかざしであろうし、家康も彼岸に渡った築山殿を偲んだことだろう。

下山する途中に家族連れのはしゃぎ声を沢山耳目した。はじめは微笑ましく思っていたが、思わず“うっ”ときた。「暖かい 桜の下の はしゃぎ声 不意にグスンと 隠してグラサン」。家族連れの場合は辛いな。サングラスでよかった。

二俣城を後にして再び国道152号線に入り北上し、二俣町付近から右折して国道362号線に入りひたすら春野町に向かい北上を続ける。目標は犬居城址だ。新秋葉橋で気田川を渡って直ぐ右折して、古い静かな町並みを案内標識を辿って抜け登山口まで到着し駐車して徒歩で登る。0.6km徒歩25分と案内があった。これは随分と急坂だろうと直ぐに理解した。予想どおり、息をあげて頂上に到着した。本丸址である。標高250m、東西600m、南北650mの連郭式の山城だ。南側は急涯だが北側は地形的にやや弱い。このような所にも、頂上には展望台があり周囲を見渡すことが出来るが、周囲は概ね山々だ。ただし、気田川に沿う山香荘に対する眺めは、これまた素晴らしい。輝いている気田川の堤防に竹林と桜が植えてありその新緑と淡い桜色が鮮やかで、なんとも心洗われる眺めである。犬居城は承久の乱の後この山香荘に入った天野氏の本城である。1576年2度目の徳川氏の攻撃に破れて甲・信州へ下るまで、北遠州の在地領主、鎌倉幕府の御家人、国任領主、今川氏に於ける北遠の雄としてこの地に覇と武を示した。天野姓とは、そういう名門の家系なのだ。「見下ろすは 犬居の庭か 竹桜堤 気田の流れに 時は映れり」という気持だ。下山して国道362号から県道44号線を南下して磐田丘陵の終点を探した。そこは、JR磐田駅だった。やはり明治の人は賢いよ。

## 駿府から遠州へ（その7）

今日は、5月最後の土曜日、久々に良い天気にも恵まれた。来週からは、きっと梅雨入り仮住いはしばらく霧の中に入る（厄年頃から喘息と診断された筆者が一番嫌いなものが仮住い周辺のこの霧（雲？））だろうから、遠出をすることにした。

目的は、遠州の西端引佐郡における氏親の足跡確認だが、付随として井伊氏の発祥地と南北朝の残像も掲げることとした。というよりも、研修後振り返ると、本日は後者の方が主題となったようだ

まず、井伊氏について触れると、井伊氏は井伊谷一帯に興った豪族で、鎌倉時代後期は、引佐町の三嶽城を中心に、南を浜松市の鴨江城、西を三ヶ日町の千頭峯城、東を浜北市の大平城で固め、いわゆる浜北一帯に覇を称えていた。足利の時代を迎えようとした時期、井伊氏は、南朝の後醍醐天皇の皇子宗良親王を迎え、遠江の南朝勢力の中心となった。

故に、歴史の事実は変えられず、北朝方に破れることとなる。南朝軍と高師泰率いる北朝軍の攻防戦は、三ヶ日町の大福寺に残る「瑠璃山年録残編裏書」に拠ると、歴応二年七月二十二日、北朝方の高師泰（越後殿下）の軍が大平城に侵攻し、高師兼（尾張殿）の軍は浜名方面に侵攻して七月二十六日に鴨江城が落城、十月三十日に千頭峯城が落城して、翌年の歴応三年正月三十日に三嶽城が落城し、八月二十四日に大平城が高師泰と遠江国守護の仁木義長の軍によって落城したとある。同じ時期、同じ南朝方に付き、歴史に勇名を馳せ、度々歴史上に、赤心憂国の士と讃えられる楠木正成と比べると井伊氏はあまりにも悲しい。

が、ご存じの通り、戦国の時代を迎えると、井伊氏は歴史舞台に飛び込んでくる。

本日訪ねたのは、先述の内、千頭峯城、井伊谷城と三岳（獄）城。

朝7時に仮住いを出発。朝はまだ肌寒いので、ジャージ上下を着て出かけた。東名高速道路に乗ってすぐ、久しぶりの富士川SAに立ち寄り車両点検、融雪の富士山を眺めて初夏を感じつつ西進を続行、およそ2時間ほどで浜松西ICに到着するも浜名湖花博で混雑していたため三ヶ日ICまで足を伸ばし、当初の前進目標を三岳城から千頭峯城に変更した。ICで千頭峯城の近くにある摩訶耶寺への道順を尋ねた。地図まで渡してくれて、概ねの道のりを教えて下さった。御厨の人も、駿河の人も、遠州の人も優しい。やはり御殿場だけが静岡の中で異質だということか。

ICを出て国道362号線を西進し、三ヶ日市街地から国道301号線に入ると要所要所に摩訶耶寺への案内が出ているので、これに従って京都西芳寺と並ぶほどの庭池を有すといわれる摩訶耶寺に到着した。この摩訶耶寺のすぐ北に千頭峯城への林道がある。車で少し登ると城趾への案内がある。道がくねる山肌はどこも蜜柑畑、さすが三ヶ日、愛知で勤務していたとき冬の味覚は三ヶ日蜜柑だったことを思い出した。城趾への入り口から山道へと登って行くと左手に30坪ほどの南曲輪跡が見える。本丸跡地は2～300坪程の広さがある。人の手が入ったと思われる崖は見られるが、さほど築城の跡は見られない。戦国時代前の山城は葛山と同じだ。麓から700m、比高差300mで三ヶ日から新城へ向かう宇利峠までの穀倉地を見渡すことが出来るが、北～東～南への視界は悪い。これを補うように南から北へ、鯉山砦、隠尾峠、中千頭砦、峠曲輪が外郭を取り巻き、引佐丘陵一帯への視界を確保している。井伊氏西方拠点として、奥山朝藤以下100名程で3ヶ月籠城した。はじめて見たが、この山の戦いの戦死者に対する慰霊碑が建立されていた。合掌！

## 駿府から遠州へ（その8）

千頭峯城を下って、国道301号線に戻り、「ここを北に行けば新城だよな。」と懐かしみつつ南進した。三ヶ日市街から国道362号線に入り東進する。気賀を過ぎて国道257号線に入り北上し、井伊谷の信号から西進し引佐町役場の駐車場に止め、北側の山に向かう階段を登った。蜜柑畑を散策するも目的地の井伊谷城趾が見当たらず、お仕事に取りかかろうとする御年輩のご婦人に道を尋ねた。やはり、丁寧に教えて下さった。しかも、此方の顔色を見ながら解ってもらえただろうかという心配顔で。此方も何度も「有り難うございました。」を繰り返して、教えていただいた通りに道進んだ。多目的センターのちょうど裏山に、城山公園の標識があった。公園というだけあってやはり道路も山頂の公園も手入れがなされている。

井伊谷城趾は、京都から鎌倉に至るちょうど中間地点に当たり、かつ浜名・浜北から長篠に至る二本の経路を直接制する要点にある。また、山頂にある約200坪の御所丸跡は、引佐地区一帯に対する良好な視界を有するが、地形的にそれほど強くなくまた築城の跡も見当たらない。視程は、東南へ浜松まで、南は奥浜名湖まで、極めて良好とまでは言えない。引佐一帯に覇を称える行政上の館跡で、宗良親王は平時ここに居城したと思われる。詰め城は三岳城だろう。公園を降りて駐車場に向かうと先ほど道を教えて頂いたご婦人が仕事に取りかかっておられた。もう一度、「有り難うございました。」「わかりましたか。そうですか。」と笑顔を交わした。

井伊谷の信号をそのまま東に向かって直進するといたる所に三岳城への案内標識がある。これに従って細い山道を進む。暫く進むと三岳神社に到着。ここに車を止めて、頂上まで徒歩で前進した。途中から、獣道のような、狭く険しい雨水の通り道のような道を息を切らしながら、汗をかきながら、葉梨城や犬居城の悪夢再現だと思いつつ進み、這々の体で約300坪の吹き晒しの山頂に到着した。ところが、この疲れを一度に吹き飛ばす程の感動が待っていた。壮大な大パノラマである。北から東から南にかけて素晴らしい視界と視程を有している。赤石山脈から遠州平野に流れる多くの稜線の一つだから、平地部からはこの価値に気が付かなかったが、遠くから、牧ノ原丘陵、小笠丘陵、遠州平野、浜松の市街地、浜名湖、そして一連の青黒き遠州灘が見渡せるまさに絶好の観測点である。

三岳城は、井伊氏の本城で、標高466mに位置する連郭式の山城で、井伊谷城と同じく、宗良親王が駿河、甲斐、信濃、越中、越後、上野方面への進出を狙う拠点であった。「知らしめん 父がおもいを 駿遠に」、「君おもい 知らしめすべし 宗良が 三岳山から 兄に代わりて」という感じであったろうか。

先述したとおり、この三岳城も南北朝時代、高兄弟達に攻められて落城するが、親王は駿河の安倍城にそして信州に墜ちていった。

その後、例の氏親の天敵斯波氏がこの井伊谷一帯に入った。戦国時代へ入ろうとする時期、斯波義達は、曳馬城主大河内氏及び井伊氏と与して氏親の西進を阻もうとしたが、1513年今川の重鎮掛川城主、朝比奈泰以（やすもち）を主力とする今川軍に落とされ、以後義元が没するまでここ三岳城は今川の浜北拠点となった。

丸子の里からやっとの思いで1487年に17歳で駿府に入城してから、既に、26年、齢43♪思えば遠くへ来たものだ♪と、僕だったら口ずさんだかも。

あともう少しで、遠州一帯が氏親の手中に入る。

## 駿府から遠州へ（その9）

再び、三ヶ日ICから国道362号線を西進し、三ヶ日町から国道301号線を浜名湖の北部、猪鼻湖の西岸沿いに南進する。直進すれば豊橋だよなと思いつつ、奥浜名ビラや猪鼻瀬戸そして松見ヶ浦のマリーナの懐かしい眺めを左手に見ながらやがて見つかった正太寺への標識に従って進み、正太寺裏山の墓地へ到着した。この霊園の山頂が宇津山城趾である。宇津山城趾は、浜名湖中部西岸の湖に突きだした正太夫鼻という小さな半島に位置し、この半島を形成する標高約50mの小山そのものを利用して、長軸は南北240m程余り、曲輪の周囲には石塁や崖が施しており、室町時代の城跡ではない。氏親の城である。城趾からは、北に本城山～猪鼻瀬戸～宇志、東に館山寺温泉を含む浜名湖東海岸～浜松市街、南に新居関一帯から湖西市の浜名湖西岸一帯を、西に多米峠や本坂峠に向かう姫街道を見通すことが出来る。やはり交通の要衝である。そして当に背水の陣的な築城だ。

天竜川を越えた氏親は、朝比奈泰熙をもって、曳馬城（現在の浜松城付近）に大河内貞綱、巨海・高橋氏連合軍を破り、飯尾氏を曳馬城に置いた。しかしながら、三河への足がかりとするには曳馬城はやや遠く、1498年の大地震により浜名川が崩れ今切口が出来たことにより湖北の交通需要が大きくなったことから、この正太夫鼻に1506年に宇津山城を築いた。

この宇津山城の話の前に、順序としては、浜名城の話が出てくるべきであるので若干記述する。浜名城は、名前の通り浜名氏の居城で猪鼻湖の東側半島の都筑付近から、猪鼻湖に張り出した小さな半島にある。この付近一帯には、不景気の影響で主不在の住宅が目につくものの東急リゾートタウンという別荘地が立ち並んでいる。氏親の遠州進出に伴い、浜名氏は今川の配下となったことから言えば、ここ浜名城は氏親の時代、無傷であったはずだが、残念にも見つけられなかった。

こうして、曳馬城、浜名城、宇津山城とこの浜北一帯に基盤を築いた後、1513年に三岳城を攻め、これを落城させ、遠州一帯をほぼ手中にした。

そして、いよいよ三河へ進出し拠点を確認して遠州を安全化する。

一つは、長篠城である。武田氏と織田・徳川氏連合軍の戦いのみが有名ではあるが、永正5年（1508年）、荒尾菅沼氏・田峯菅沼氏とともに設楽地方の山家三方衆のひとつであった長篠菅沼氏：菅沼元成が築いたものだが、氏親の三河侵攻とともに今川氏に従った。義元の没後は、はじめ徳川氏に従ったが、信玄の勢力が遠江や信濃方面から伸びてくると山家三方衆はそろって武田方についた。交通の要衝故に時代の主人公に翻弄され続けた土地である。この菅沼氏が今川氏に与したことで、北・南設楽地方一帯は今川勢力下となった。そして更に一つが、今の豊橋に所在する吉田城と牛久保城だ。どちらも今川氏の豪族牧野古白が築いた城でそれぞれ1505年と1529年の築城である。そしてもう一つが、宇利城だ。西三河から東三河の占領に取りかかった松平清康は1530年宇利城を落とすとあるが、それ以前は今川の配下（いつに配下となったかは不明）であった。

このように、三岳城、長篠城、宇利城、吉田城を手中にしたとき遠州は完全に今川の手の中になった。

氏親は、1526年遠州を奪回し、三河への進出拠点を確保して56歳で没した。

このような歴史を見ると、只、武力をもって西に版図を広げていったのではなく、外交により同盟関係を広げつつ、刃向かう勢力を屈服させていったことがわかる。

戦国時代はすでにこの時始まっていたのだ。いよいよ、義元が登場する。（終）

# 武田神社と恵林寺

たぶん学生の頃、修養期間の合間に教官が気を遣って見学に連れて来てくれたと思うが、殆ど覚えていない。確か恵林寺で「心頭滅却すれば火も自ずから涼し。」と言う言葉を当時の案内の方から教えて貰ったことぐらい。

でも、折角、近くにいるから、休みを使って自ずから研修に臨むべし。

最初は、7月に朝早くから武田神社へ

我が勤務地と仮の住まいは、例年通り梅雨の霧雨の中。でも、籠坂峠を越えて山中湖に入ると天気は回復気味、河口湖に入ると殆ど晴れ、そして、御坂峠を越えて甲府盆地に入るともう全くの快晴、真夏日より。

まず、甲府善光寺に立ち寄って世界の平和と日本の平和をお願いした。

そして、いよいよ武田神社！

武田神社は、躑躅ヶ崎城の址に建てられたものと解り、汗顔の極み！

でもこれで、今までの疑問「躑躅ヶ崎の館ってどこにあったの？」が解決！

館は、帯那山系の南の麓、甲府盆地の北端で、しっかりと甲府市街を見渡すことができる位置、館の頃は城下町のメインストリートだったのだろうか、神社の頃は宮前通りだろうと思われる道路が甲府市街から館までまっすぐ向かい、しかも館は全くの平城で、戦術用語で言う依るべき地形など全く見あたらず、信玄の自信の程を垣間見る思いだ。

なるほど、『人は石垣、人は城』なのだ。

次は、恵林寺。でも、行く決心をつけさせたのは、我らが師匠の言葉「武田神社に行ったのなら、信玄の菩提寺は訪ねるべきです。それに枯山水は見事です。」。

9月上旬、我が仮住い、富士山の南側山麓は、やはりジメジメした霧の中。そして、期待したとおり、やはり甲府盆地は全くの快晴、真夏日より。武田勝頼が、信玄の遺言通り、三年後に菩提を此処に移し葬儀を行ったものの、爾来、武田氏は滅亡への階段を下り始め、勝頼自刃の後、信玄の葬儀を行った快川国師までがここで兵火に包まれた。まさに、因果と歴史の冷徹さを思い知れと言うことかだろうか。

一方、夢想国師が造った心池庭は時間をかけてて見学したが、同氏が造った西芳寺の苔庭の方が趣があるかな？とと思っていたところ、「行った季節が悪い。」と師匠からピシヤリ！『拙速』だけではやはりだめなのだ。

夢想国師（疎石）は室町・南北朝の時代の名僧で、後醍醐天皇の崩御に際し、御霊を祀るべく足利尊氏が建立した天竜寺の開祖で、南北の朝廷を一つに戻そうと東奔西走した足利直義の良き理解者でもあった。

ただし、このことを知ったのは、この訪問よりも約一年後、竹之下合戦について調べた折りでした。

# 武田と遠州（その1）

かつて、律令制の下で、諸国を納めるべく国司が設置された。彼らは、それぞれの任地で朝廷のために、戸籍、班田収授、租税及び徴兵等を行った。その取り立ては、役小角が現れたように、人々にとっては苦渋でしかなかった。更に、平安時代になってくると受領国司よりも遙任国司が多くなり、地方に対する監視の目が行き届かなくなる下地を作った。一方、藤原を代表する大貴族達は、不輸不入の私有地“荘園”を全国に持つようになった。この時から現れる地方豪族は、国司制度等や荘園での苦役に反感を持つその土地の人々と共に一所懸命に根付いていく。平将門などはよい例だろう。

鎌倉時代になり、頼朝は、国司制度の他に、御家人をもって守護や地頭を配置し、公武二重支配をとり武家の力を増大させていった。守護は、謀反人の追捕、殺害人の追捕、京都大番役の催促を行う者で、国につき一人、東国の有力御家人が任命され、後には在庁官人の支配と国衙の行政もするほどの権力を持つことになる。地頭は、年貢の取立て（年貢・公事などの納入・徴収）や土地の管理などを行い、更に、その土地を守る軍事・警察権を請け負う見返りに反別5升の兵糧米を得分（利権）として取った。これが更に、新補地頭になると、その地頭の土地の一部を領有するようになる。おかれた場所は、平家没官領（へいけもっかんりょう：平家の滅亡によって所有者がいなくなった土地）をはじめとする謀反人の土地で、後に国衙領や荘園にも置かれるようになった。こうして武家（頼朝）は、全国の軍事・警察権や一部土地の管理権を手に入れることとなった。公家政治の終焉へのプレリュードだ。

時代は進み、室町時代からは、守護の役目は名ばかりとなり、南北朝になると、守護受が始まり、荘園等が侵略され、力のない地頭は守護の家臣となり、領主化した守護大名が出てくるようになる。力のある守護大名は、やがて戦国大名へ、力のない守護大名は地侍に下剋上の洗礼を受け没落し、もう一つの戦国大名を生ませる下地となる。

今川家や武田家は当に、この守護大名から戦国大名に成長した由緒と力在る家柄なのだ。

その武田家は、今川家の没落後、同家が変わって駿府や遠州の支配を徳川家に替わられるまで続ける。この時期、この地域の城は戦略的な観点から配置され、しかも、素晴らしい築城が施されている。殆どの城は、今川の城を活用したものだが、中には戦略的重要性から新たに構築したものもある。その一つが、諏訪原城である。諏訪原城は、東海道菊川の坂を直接制する金谷の要地に、大井川を背にして断崖の上に位置し、西側のなだらかな丘陵には扇形の堀を巡らし、後方は逃げ場のない、まるで背水の陣を強いられているような形で構築されている。馬場美濃の守による縄張りだ。武田の築城はどこも領かされる。

遠州の要域は、高天神城、諏訪原城、朝比奈城、相良城そして小川城で護られていた。相互の協力を容易にする陣形だ。通信用の狼煙も有名である。

## 武田と遠州（その2）

遠州との繋がりには武田だけではなく、信州という土地そのものにもあった。その好例が塩の道である。諏訪から秋葉街道を通過して水窪、佐久間、春野と山間部を抜けて遠州に入り、森、掛川、菊川、小笠町そして現県道69号を通り相良～御前崎へ到着する。

この県道69号沿いに正林寺があり、勝間田、横地の豪族を打ち破り、凱旋途中で寝首をかかれた義元の祖父忠義の墓碑がある。その子氏親は駿河・遠州の守護として実質上の版図を手中にする。そして、その子義元は、更に三河へ進出しやがて、ご周知の通り、京の都への道を目指すもその途中、本人にとって見れば不慮の死を迎えることになる。以前記述したとおり。

義元が没したのち、遠州はまた戦乱の地と戻る。覇者今川に変わって登場するのはご存じ徳川と武田である。当初は、大井川を境として、西を徳川、東を武田と紳士協定を締結するが、武田はすぐにこれを無視して山崎の砦に入り、小山城を構築する。

小山城は牧の原台地の金谷から坂口、吉田町へと流れている稜線の台端に位置し、北側には湯日川が流れている。

今は、冬だからであろうか、安倍晴明がシナから持ち帰ったとも伝えられる有名な国定天然記念物能満寺の大ソテツをあまり好感を持つことなく眺め、左手にある急階段を仏像眺めながら、台上に向かい、登っていった。

例に漏れることなく、急涯の台上に本丸は構築されており、本丸の周りは土塁が築城されている。

城址は、牧の原台方向に向かって備えており、台上からの侵攻を防ぐように三重堀、三日月堀、馬出郭が築城され、後方は切り立った比高差約20mほどの崖で、背崖の陣をひいた形だ。どこかで見たようなと思いながら天守閣の資料館を訪れるとあの武田先方馬場美濃守の縄張りだと分かった。諏訪原城と同じ築城思想で構築されている。馬場美濃守は、武田信虎、信玄、勝頼と三代に亘って仕え、長篠の戦いにおいて勝頼のため殿となり壮絶な最後を遂げたことで有名だが、信房、信春、信政、氏勝、信武という名前を持っていたことを知らないと言われ、諏訪原城と小山城の縄張りとは同一人物によるものだと気付くのに時間を要す。

資料館に登って四周を見渡すと北に身延山系の山々、東北遠くに富士山、宇津ノ谷峠、日本平、東に大井川扇状地と焼津の市街、南に吉田市街と駿河湾、西に牧の原の稜線等を視認することができる。良好な視界を有している。

小山城は東に向いての備えならば、後方の牧の原台地一体と連携して有効な拠点となっていたであろうが、西に向いての備えは後方に拠るべき地形がなく心細い。

しかしながら、諏訪原城と同じように、武田の大井川以西の遠州最後の砦として、一歩も退かない意志を示した築城としなければならなかったであろう。

# 戸倉城

戸倉城址は、現在の清水町本城山公園にある。本城山は、狩野川南側の伊豆山系に続く徳倉山の一部で、狩野川に突き出したところ、ちょうど柿田川が注ぎ込んでいるところである。この頃の平山城は根古屋式が多いが、ここも同じで、平素は現在の竜泉寺付近の居館に住まいし、有事にはその頂上付近一帯の曲輪に籠もって戦ったのである。

麓の駐車場に車を置いて、徒歩で頂上に上る。案内板には頂上まで約6分と書かれていたので安易に急ぎ足で登った。途中、双眼鏡などを持った結構年輩のハイカーの皆様に挨拶をしながらであったが、頂上に着いた時には、結構、足に尿酸が溜まった。この時代の山城共通の、いつもの通りの、急崖を、比高差約70m程登ったのだから当然ではある。

頂上は、本丸跡らしい、東西約40m、南北約30mの平地になっている。

戸倉城の築城は、文明年間（1469～1487）の今川家によるものとも伝えられているが、本格的な城砦が築城されたのは北条氏綱（1486～1541）の頃と案内板に説明してある。

ここの素晴らしさは、何と言っても、四周に対する視界である。公園に整備されている展望台から見渡すと、北西に愛鷹山その後ろに冠雪の富士山頭、北に御厨平地を見通して遠く生土山まで、北東から南にかけて箱根・函南・伊豆の山々、西は駿河湾を越えて蒲原、その遠くに身延の山々、そして、近くには愛鷹山麓の富士市から沼津、御厨、三島と伊豆の函南・韮山・大仁・長岡にかけてのすべての平地部を見下すことができる。まさに、ベストオブビュー！

年輩ハイカーの方たちが、カメラを持っていたり、双眼鏡を持っていたりするの、これを楽しむためだったのだ。

こんなに素晴らしい観測点ではあるが、ここに至るには行動を秘匿することが出来ない平地部の、しかも北側を狩野川で遮られてしまう接近経路しかない今川勢にとっては、結構使い勝手の悪い地形であったはずだ。愛鷹山系山脚部に拠っていた今川から見ればここは、伊豆の山々の最前列の一つに過ぎなかったはずだ。しかもその伊豆には親類北条がいる。関心が少なかったであろう。西方勢に重要な地形として認められるのは、沼津に三枚橋城が出来てからである。やはり武田だ。

一方、東勢即ち北条にとっては絶好の緊要地形である。ここから、蒲原城、善徳寺城、興国寺城、長久保城、葛山城、生土城、足柄城、大森城、山中城、韮山城等周辺すべての居城の様子が窺えるし、通信にも利用できる。しかも、伊豆方向から富士宮・蒲原方向および御厨方向への進出拠点でもあり、反対に両正面からの攻勢に対する西の防護拠点ともなり得る。義元の不慮の死に伴う、三国同盟の破綻後、北条はこの城に拠って甲斐の武田勢と対峙していたとある。

その頃、徳川家に駿河を追われた今川氏真が、この城に難を逃れて、一時期、城主北条氏光に保護されていたとも伝えられている。

更に、太平洋戦争の頃、高射砲陣地が構築され、軍人が地形判読訓練のためにこの城に登ったと言う史実があるというが、十分領ける。

「英霊や 愛鷹富士は 今も尚 海内はるか 秀麗なり」感謝・感謝だ。

駿東を見渡すなら、北の長久保城、南の戸倉城だ！ 断然見学するべし！

# 葦山城

やはり6年前に1度訪ねようとしたことがあった。しかし、江川太郎左右衛門の歴史を訪ねたついでに思いついたものだから、結局、時間の制約で葦山高校の後ろの山がそうなのかというぐらいの位置の確認だけに終わってしまった。

今回は、先の興国寺城の探索に続いて車を走らせ訪ねたため脈絡をもって探索することができた。

葦山城入り口には城池という人工的に整備させたものではあろうが、水鳥や魚や水草が自然に近い状態で生息している美しい池があり憩いの場であるらしい。葦山城は、平山城ではあるが、伊豆山系の葦山峠から西に降りる山裾に接続し、平地部からの比高差は10m以上もある極めて急峻な小山の上にある。

北条早雲は当時の堀越公方足利茶々丸を追い出し、興国寺城からここに入城した。戦国時代の到来である。

入り口から山頂までは約300mの道程、リヤカーがやっと通るぐらいの道幅だが、通路脇には石を積み上げた石塀があり道の形状が崩落することをしっかり防いでいる。山頂は連郭式に三つの郭があったらしく、本郭と思われる山頂の広場からは、北に三島・富士山、西に伊豆長岡、東に箱根から伊豆の山々、そして南には天城山に繋がる青々とした山々が展望でき、見渡す限り俺の土地だと言わんばかりの気にさせてくれる。やはり、緊要地形だ。

山頂付近は、興国寺城ほど狭くはないが、それでも広さは知れている。

「箱根の山を越えれば広大な相模の肥沃な平野がある。小田原の城も住み心地は此处よりは良かろう。手に入りたい。ただ、ここから見る富士山や箱根の山谷の景色も捨てがたい。」と早雲は思ったのではなかろうか。

早雲は、ここで機を伺い、やがては小田原城へ入城する。そこで、後北条の基盤を固めた後、晩年またこの葦山城に移り住み北条の西側を防備したと言われる。

でも、晩年の早雲の気持ちは、残された時間、富士山を望む景色をゆっくりと楽しみたかったのではなかろうかと思ってしまう。

三島由紀夫も三島から見る富士山の雪が好きで、ペンネームにしたらしいから。

そうすると、富士山を眺めることができる場所に住んでいることだけで、随分と幸せなことのよう思える。

富士山周辺に住んでいる人はそのことを有難く思っているのかな？

# 葦山から伊豆へ

今年台風の当たり年で、伊豆地方も随分と被害を被った。特に、修善寺から伊東にかけては被害が大きく、復旧活動が10月の今も続いている。が、久々のお天気なので、日帰り研修小旅行に行きたくて堪らず、被害状況も知りたい等と勝手な理由を見つけ、伊豆へ出かけることにした。いつもの御厨隘路R246を南下して沼津からR1、三島からR138の経路で修善寺駅に向かった。

当初の目的地は、柏久保城址だ。

柏久保城は、堀越公方足利茶々丸を滅ぼし葦山に入った伊勢宗瑞が伊豆の制覇の足掛かりとして狩野氏を討つために築いた城山砦で、修善寺駅の東側にある天桂寺の北側、愛宕山の山頂標高180mにある。調べたところによると天桂寺から5分というが、思った通り、やや息を切らせながら、しかもくっつき帽子で悩まされながら登っていくこととなった。でも、栗やキノコやイノシシの牙の跡に秋を感じながら、頂上に近づくにつれ、急涯、空堀、土塁、石垣跡を見つけることができ、ワクワクしてくる。やや東西に長い300坪ほどの山頂は、整備され、お社が祀られている。合掌！この付近でも戦闘があった様子で、新九郎谷や地獄谷の地名を案内してある。

城趾からは、西側に、南北にうねる狩野川とR138、そしてこれに沿った修善寺牧之郷一帯が、遠く北西には富士山が見渡せ、南は狩野川の支流とその穀倉地、そして伊東へ抜ける道路をかん制できる。東側は伊東への接近を阻む箱根から天城山へ続く伊豆の屋根だ。柏久保城趾一帯も、いわゆる緊要地形で、天城湯が島、伊東、土肥、戸田から葦山に抜ける接近経路を制する要点である。ここを押さえおけば、青羽根の狩野氏が葦山へ直接打って出ることを阻むことができる。流石早雲。

柏久保城趾を降りて再びR138を南下し狩野城趾に向かう。松ヶ瀬の柿本橋を過ぎて直ぐ右に、古いが大きな狩野城趾の看板があり見つけやすい。看板から整備された階段を登っていくと、なんとも想像を超えた、大堀に囲まれた、西～本～中～東～南の連郭式曲輪址がはっきりと分かる狩野城趾を目の当たりにすることができた。欲を言えば、もう少し、手を加えて急涯を作り障害度を強くするとともに、曲輪の周りに散在する台を無くすことにより、防御力は向上していただろうと思う。

更に、各曲輪の配置と東曲輪の東の台（出丸）の位置が中途半端である。東の台は突角になっており、他の曲輪からは相互支援を得られないため、独立的な戦闘を強いられ敵の集中攻撃に晒されやすい。そして、敵はここを手に入れたならば、距離的に十分に離隔していないため、ここを次への攻撃の拠点として使用することが出来る。各曲輪相互間の関係も同様で、ひとつずつ、曲輪を集中攻撃により奪われたであろうことが容易に想像できる。

相互支援が可能な円陣的な連郭方式を何故採らなかったのか、やや残念である。

それにしても、植林や下草を刈り取り、大規模な整備を計画し実行されてきたことが良く分かる。流石、静岡県。いつもながら有難うございます！

ほんとうに！感謝！感謝！

# 箱根（その1）

国道1号線を三島方向から芦ノ湖に入る所で箱根峠を越えていく。峠自体は、景観が良いとは言えないが、峠を下りて行くと、それまでの右手や左手にあった広く、高く、青い雄大な景観から、芦ノ湖の青と緑の涼しい景観に変わる。これはこれで、また落ち着いていて良い感じだ。

箱根の関所は今復元工事がされてる。完成したらまた楽しみが増える。

箱根の関付近からの富士山の眺めお勧め地点は、まず、この関の湖畔からだ。湖畔を北に向かって歩く。左手正面には、灰緑色に澄んだ、深く、穏やかな芦ノ湖、その向こうは、箱根の湖尻峠に連なる深緑色の山々。更にその向こうに真っ青な空を背景にして、空よりちょっと黒い青色の富士山が、三角に顔を出してくださっている。

湖畔の通路には、石垣が施されている。通路の崩壊を防いでいたのであろう。きっと、左手の景観は昔もこれとさほど変わりはなかったはずだ。関所を無事に通行できた人は、この景色を更に晴れ晴れしい気持ちでふーっと眺めたことだろう。

江戸時代の箱根付近一帯の関所は、谷ヶ村、川村、矢倉沢、脇関、根府川、仙石原、箱根の計6カ所。入り鉄砲、出女を特に取り締まったらしい。お玉が池の話は悲しいが、藪入りという、間違っただけには入った人に対する不問の処置は、役人の裁量の余地があったということだ。情緒的日本人の一面を覗かせている。

役人だって、人間なのだ。要は、やはり、その人その人が持つ価値観と資質の如何によるということだ。現代にも当てはまる。

もう一つの、グッドポイントは何と言っても元箱根離宮跡からの眺め。

離宮2階から、正面にダークグレーの深い湖、深緑色の湖尻山系、水色の空と白い雲、そして、群青色の胸を張った富士山が見える。麓の人工物が全く見えないので、大きなパノラマ写真を見ているよう。いや反対だ。この眺めを上手な写真家が撮影するときとそうなるのだろう。

この小さな丘の麓に「箱根の山」の歌碑がある。「♪函谷関も物ならず♪・」

最後に、ちょっと離れるが、乙女峠からの富士山について付言したい。

乙女峠は、箱根外輪山の稜線上にあり、御殿場市から箱根町の境界に位置し、金時山へ連なる南峯の標高1005mの峠である。

「富士見三峠」の一つでもあるように、ここから見る富士山の景観は凄い。富士山が丸ごと見える。富士山のすそ野を見下ろしてから、ぐーっと富士山を見上げる感じになる。とにかく、「でっかいな！きれいだな！すごいな！」と口にしてしまう。おそらく日蓮上人もうなったことだろう。

他の二つは、山梨県河口湖町の御坂峠、静岡県清水区の薩埵峠であるが、いずれも甲乙つけがたい。

ここから、我が仮住まい付近もうっすらと見て取れる。今は梅雨明けの真夏だ。

## 箱根（その2）

今日15年11月2日は、御殿場側から箱根に入った。

まず、国道138号線の途中から、乙女峠に向かわず、長尾峠に至った。峠の西側で御殿場～富士山を振り返る。紅葉の木々が、山裾の方に目映く連なった後、その終点の遠く先から空を突き上げるように富士山が聳えて見える。豪快かつ秀麗。乙女峠から見る富士山も豪快だが、長尾峠からだど富士山麓の御殿場市街等の人工物が見えないため秀麗さが増すようだ。

次に、峠の東側から箱根盆地一帯を見渡す。右手奥に芦ノ湖、正面に仙石原のススキ平原や大涌谷の湯煙そして駒ヶ岳や早雲山等ガッチリとした山々、左手遠くには金時山から明星ヶ岳の山屏風が連なっている。特に、仙石原一帯に対しては、覗き込んでいると言ったような感じという表現が適切だ。

長尾峠を下って、仙石原から湿原を抜けて、芦ノ湖の湖岸の紅葉の道を走っていると、また、富士山を眺めるグッドポイントを発見した。

そこは、箱根樹木公園跡地。この公園の入り口から富士山を見通した。

樹木公園は、湖畔の丘から始まっており、赤い紅葉、黄色や茶色のクヌギ系樹木そして常緑樹が芦ノ湖の湖畔に向かって色鮮やかに続いている。その先には、静かに、芦ノ湖が深い緑色の湖水を湛えている。芦ノ湖の向こう側には、湖尻峠からの針葉樹林に覆われた深緑の山裾が左手から降りてきている。この針葉樹林の色を芦ノ湖は讃えているのだろう。その向こうには、乙女峠や長尾峠につながるカルデラ山が、紅葉した広葉樹林とススキの草原からなる山肌を見せ、意図的にコントラストの背景を演出しているようだ。そして、その更に遠くに、雲の衣装を纏い、冠雪の堂々とした仙人のような富士山が、真っ青な空の中からこちらを見下ろしている。すごい、ビューティフル！アメイジング！

次に、今回の目的地である浅間山とその南の鷹ノ巣山だ。浅間山は、戦国時代、北条家の出城鷹ノ巣城が在ったところらしいが、遺稿は見つかっていない。小涌谷温泉から南を見ると、見上げるように浅間山がそびえ立つ。そこは、乙女峠、長尾峠そして湖尻峠から小田原に通じる経路を抑え、更に、箱根峠から小田原に通じる経路を抑えている。やはり緊要地形である。

昔の人も、やっぱり、賢い！しおしてかしながら、足柄上郡山北町川西の新荘城、足柄峠の足柄城及び箱根峠から南に位置する山中城との位置的関連からすれば、南足柄郡内山の浜居場城とともに西側に備えた縦深陣地の価値が大きいはず。何故、乙女峠や長尾峠や湖尻峠には、出城を置かなかったのだろうか？戦術的には疑問が残る。

紅葉の時期の箱根路は、天気さえ良ければ、どこでも美しい眺めを楽しめる。しかも、青い空の向こうに冠雪の富士山が見えると、本当に生きている間に見ることが出来て良かったと思うくらいに感動する。

しかし、ゆっくり楽しむなら、朝の10時までに終了することをお勧めする。道路は混雑するし、霞がかかって富士山が見えなくなることがしばしばあるから。

## 御厨地方・三島

今日秋分の日は、此処に仮住いし始めて最高の日よりとなったため。夜は、仙石原で中秋の名月でもと思ったものの、夜までただ待っているのでは勿体なく、ドライブすることにした。前進目標、小田原城。前進経路、国道1号線。中間目標として山中城。

仮住いから御殿場市と裾野市を旧246号線沿いに下って三島へ抜けた。小山～御殿場～裾野一帯は昔、伊勢神宮に収穫物を奉納していたところから、お伊勢様のお台所という意味の御厨地方と呼ばれていた。意外な気がする。御厨そばは、大変美味しいので、この辺は富士山の噴火に悩まされ土地は痩せて農耕地としてはあまり適していなかっただろうとやや同情的に思っていたからだ。

いつもだったら、何も気付かなかっただろうが、今日のようなすばらしい天気は、人間の感性も刺激してくれるらしい。

この眺めは、昔の御厨の人たちと同じ眺めなのだ。

今まで何度も通っているのに、初めての発見。

何と、右手には、深い緑の富士山麓愛鷹山系、左手には、青い緑の箱根山系、正面遠くには、霞かかった青い伊豆山系が見える。とても美しいではないか。そして、もし、辺り一面が収穫間近の稲の穂で覆われていたら、何とも雄大な、幸せな景色だったことだろう。

御厨を感じる事ができたのかもしれない。

やがて、三嶋大社の正面を抜けて国道1号線へ入った。

三嶋大社と言えば、6年前に訪れたことがあるが、何時、誰に建立されたか不明の儘、2000年以上とも言われる歴史を有していることに驚かされたものだ。主祭神は、大山祇神と事代主神の二つの神様、所謂三嶋大明神が奉られている。

8月の三島夏祭りがちょうどお盆休みと重なるので、単身赴任には、訪れるのが難しい。などと思っていると、すぐ箱根山系南端となり、道は、稜線沿いに走っている。左手には遠く富士山が、右手には伊豆の山系や平野が見下ろせる。

良い景色だね。

東京から、週末たくさんの人が、御厨地方や伊豆箱根地方を訪れるのも無理からぬことと納得してしまう。

「♪箱根の山は天下の剣♪・?・?・?」うーん?

その後が続かない。山中城にも行き着かない。

# 見延路

今日は11月27日だが、今年は秋が遅い。去る22日には帰省の折りに、大分の宇佐神社を訪れたが、暖かいのか、全く紅葉の気配は無かった。今朝、目覚めたら、仮住い周辺は、久々の雨天後の晴天だ。紅葉を見たくなり、身延山に行こうと不意に思い立った。というのも母の実家が日蓮宗なので、以前から日蓮が修行して開山した由緒在る歴史に触れたいと思っていたからだ。R138号を御殿場方向に下って仁杉を右折してR469号に入り、富士山と愛鷹山の間を抜けてひたすら西進し富士宮に出る。富士川の東岸沿いを北上し、趣のある風情を再現しようとしている身延駅を過ぎて富士川西岸に渡れば、すぐに門前町が見えてくる。町営の駐車場に車を止めて久遠寺に向かった。結構な賑わいである。しかも清楚である。



門前町を抜ければ荘厳な山門で、くぐって、287段の煩悩落としの階段を息を切らしながら途中休憩をしつつやっとの思いで本殿に辿り着く。歴史を感じる仏閣と裏山のさえ渡る紅葉はコントラストをなして美しい。仏閣の中は、京都とは違い、寺院の中も拝観料無料で、御本尊にも間近で合掌することができる。「人間にまだまだ生きていくことをお許しくれますように！」

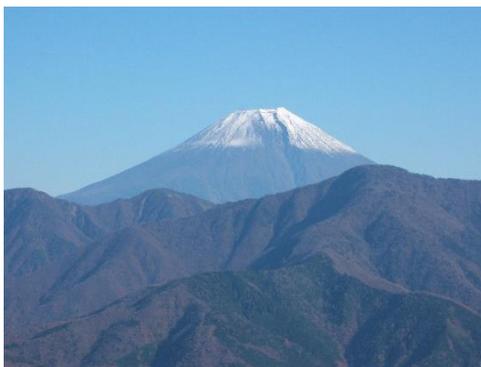


拝観を終えると、ふとお守りを買いたくなった。それも二つ。母親と伯父にでも贈ろうと思ったのか。このふとした想いの理由は後日分かることになる。お守りを収めて、ロープウェイで奥の院まで登った。ここからは、北に甲府の盆地と東に富士山を拝むことが出来る。ワンダフル！しかも、日蓮上人は鎌倉街道を往復してここを開山したのかと思うとただ感服しかない。「有り難うございます。生きかせて頂いて。」「もう、来ないかも知れない。やっぱり、来て良かった。」山を下りて、車を北に向かい走らせ帰ることにした。



途中、本栖湖の北側で有名な5千円逆さ富士を写して河口湖方面から須走に向かった。

母は、お守りの一つを伯父ではなく叔父に渡してくれた。叔父はこの時、ガンの再発で入院していたらしい。叔父が死ぬまで、枕の下で大切にしてくれたことを知ったのは翌年春の休暇で帰省した時でした。



合掌！

# 山中城

富士山から御厨地方を抜けて三島に下り、谷田東小山から国道1号線に入った。すでに、上り坂になっており、ちょっと登った三恵台では、左手正面に愛鷹山系に西の裾を隠した群青色の富士山が見えており、やがて普門庵を越えた頃からは右手には挟られたような伊豆韮山の平野と遠くに深い緑色をした伊豆山系がまで見えてくる。やはり、この付近に生活する人は幸せだ。

箱根の関を目指して向かって登っていくと、やがて、山道の様相を呈して来たところで、城跡が目に入った。やっぱり、在った。在ると思っていた。早雲が懸命に越えたところだから、小田原に入ることができた後は、反対に此处を抑えたいと思うはずだ。ここは、山中城。

興国寺城でも思ったが、此处もよく整備がしてある。当時の築城の復元はもちろん、しっかりと芝刈りも実施されており、うれしい限り。

国道1号線の西側には、西端から西櫓、西の丸、元西櫓、二の丸、本丸、本丸の北側に天守と北の丸だ。西櫓は、急峻な地形に依るとともに畝堀や障子堀で固めてあり、西南方向に展望すると左手から駿河湾と沼津の平野、正面に愛鷹の山並み、右前方に頂点の様な富士山が見渡せる。やっぱり、緊要地形だ。

国道1号線の西側には、秀吉の小田原攻めが近づくにつれ、大急ぎで構築した、すり鉢曲輪、だい崎出丸、御馬場曲輪がある。

秀吉の攻撃を受けるまでに完成には至らず、何と半日で落城している。松田康長や間宮康俊の無念やいかばかりか。今となっては、語ってはくれない矢立の杉や大カシに当時の栄枯を訪ねるのみ。

なぜ、半日で墜ちたのかという疑問に今となっては明確に答えることなどできはしないが、戦術的に言うならば国道1号線正面と城の北側は地形的に弱いということだ。西の丸からはかなり離隔している構築途中のだい崎出丸が十分な掩護を得られずに過早に墜ちたとしたら、北側に回られて、所詮多勢に無勢で勝負の形成は一挙に付いたのではないだろうか。

この間、韮山城も善戦を重ねて、小田原城落城まで持ち堪えたという。

当時、韮山城と山中城は直視できて、何らかの通信手段が取れていたらしい。山中城の落城を知りつつ、不安な中、韮山城主氏規は四万の大軍に対して僅か三千の兵で奮戦した。死しても恥じない名誉か、大儀か、使命観か。

現代においても、これらの価値観は・感覚はさほど変わらないと断言したいものだが。

# 横地城（その1）

菊川ICを降りて南下するとすぐに相良町方面の標識があるので其処を左折する。そのうち、横地城址あと2.5kmと教示されたモニュメントが目につく。そのまま直進すると、トンネルの300m程手前を左に入る道がある。そこを行くと約300m程で横地城の説明板がある。駐車場に車を止めて徒歩で行くことになる。

何もなければこの通りだが、今日は、高校駅伝大会が開催されておりで道路が一時通行禁止となっていたため、道が解らなくなり、途中、2度ほど道を尋ねた。二人とも「お城かい！」と言って、丁寧に教えてくれた。

このとき、私は「自分は思い違いをしていたのでは？」と思った。

応仁の乱で国中が東西に分かれていた時、横地城の横地秀国は勝間田城の勝間田修理亮とともに遠江守護斯波義廉に与したため遠江を打うとした今川義忠（伊勢新九郎の姉北川殿の主）に滅ぼされた。その直後、義忠は横地氏等の残党に命を奪われたため、後約10年間、伊勢新九郎による決着を見るまで、今川家の内紛が続いた。このことだけしか知らなかったために「横地氏はあまりたいした武将ではなかったのだろう。城跡もそれほどたいした物ではないだろう。」という先入観にとらわれていた。だから、土地の人が「お城かい？」とやや親しみを込めた返事に「あれ？もしかして、たいしたものかも知れない！」という反省と期待をさせられたのだ。

徒歩で、横地神社へ上がっていった。横地城址一帯は、県立自然公園となっており、静岡県下の城址はどこもそうであるが、散策や見学がしやすいように良く整備されてある。ありがたい。

横地城は、なんと八幡太郎義家とこの地方の豪族藤原光頼の娘の間に生まれた横地太郎家長に始まり、この地方に源氏の覇を根付かせ、善政400年の歴史を有するという。思い違いも甚だしい！赤面の極み！

牧ノ原台地から小笠平地へ流れる一つの稜線でおそらく最も急峻な尾根が連なっているのであろう。東曲輪～中曲輪～西曲輪を基軸とした連郭式山城で標高は約100m、幅は約1.5kmに達する。葦山城もそうだが、この当時の山城は天然の要害をよく利用し、不足するところを人による築城でよく補っている。我々にも勉強になる。よく、このような地形というかや急峻な小山を探し出すものだ。そして、地形的に弱い所は崖、堀、土塁を作り強化している。

各曲輪で見通せる地域は異なるが、全般的には西方向の小笠平地から小笠丘陵に対する良好な視界を有しているが、東～北は牧ノ原丘陵でありあまり良好な視界とは言えない。南も牧ノ原の台脚で視界は遮られている。言うならば小笠平地から小笠丘陵への良好な観測点とは言える。故に、小笠平地に対するシンボルにはなるだろうが、所謂緊要地形と言うにはやや足りない。交通の要点を押さえてはいないからだ。戦国時代よりも前から在る山城は、地域の守りという役割より、城そのものの守りに重点が置かれたように思える。

## 横地城（その2）

城構えを言えば、西の端は詰め城で、最も小笠原平地に張り出しており、西及び南への視界を有している。そこから西曲輪までは一騎駆け・構えの段や金の玉の谷という一騎しか通過できないような尾根と深い急峻な崖が続く。構えの段とは一騎駆けの要所要所にある敵の迎撃場所、金の玉の谷とは、金の玉を谷に投げ落とし、武者が駆け下りてこれを探し出すという訓練場所。西曲輪の一角に横地神社がある。4段の土塁の頂上にあり、西方及び東方への視界を有す。中曲輪は、二つの曲輪からなり、副将が指揮したところ。そして、何と言っても、圧巻は、東曲輪。ここは金寿城とも呼ばれ、また一段と高くなった地形の上に聳えていた。全周に対する視界を有しており、地上の人々からは如何にもお屋形様のお城と仰ぎ見られていたのであろう。この北は、更に一騎駆けが牧ノ原台地まで続いている。

急峻な尾根の上に築城されているが、悪く言えば、横に長く、拠点の点在する連郭陣地になっている。戦術的観点から言えば、相互連携が取れず各個撃破されやすい。各曲輪ごと孤立した拠点的な戦闘を強いられることとなる。これだけ横に長いと途中、途中を散々分断されたのではないかと思われる。

降りる途中、山肌に地層が見えているのに気がついた。ずーっと昔に、隆起したのであろう。だから、急峻なのだ！急峻な地形を探す良い視点を発見した思いにある。ちょっと、にんまり！

駐車場まで降りてきたら、“くっつきぼうし”がズボンに沢山ついてた。生き物に種子をくっつけて、遠くまで運んでもらい子孫を増やそうというわけだ。植物でさえ子孫の繁栄に一生懸命だ！日本人ももっと真剣に考えねば！

なぜか？それが、種の永遠の命であって、魂が向上するための修行の場、つまり生まれ変わりの場所を確保するためだからだ。横地城の人々もその後どこかの誰かに生まれ変わってまた修行しているのだろう！ひょっとしたら、輪廻を断ち切った人もいたりして？・・などとぼんやり考えながら、“くっつきぼうし”をとって、勝間田城へ向かい前進。

牧ノ原台地は、緩やかに見えるけれど、下の平地部から台上へ抜けるには結構な坂道を上らなければならない。

今回は川上方向から上った。上がりきると、一面、お茶！お茶！お茶！のお茶畑でいっぱい！

コンビニに寄って、お茶を買うついでに「勝間田城址」の場所を訪ねた。今度は知らないらしい！

**此处で徒然記一旦は打ち切りです！**